

〔論 文〕

Middleton (Essex) における14世紀初頭の  
慣習保有農民 (Custumarii)

—— Extenta Manerii de Middeltone の分析 ——\*

能 登 征 夫

目 次

I はじめに

II 史料について

III マナーおよびマナー経営の概要

1. マナーの概要

1) 所在

2) 保有農民数

2. マナー経営の概要

1) 穀物生産

2) 雇用労働

IV 14世紀初頭における農民の土地保有と義務負担

1. 自由農民の土地保有と義務負担

1) 保有農の数

2) 保有規模

3) 裁判所への出廷義務

2. 慣習保有農民の土地保有と義務負担(1)

1) 保有農の数

2) 保有規模

3) 裁判所への出廷義務・貨幣地代額

3. 慣習保有農民の土地保有と義務負担(2)：賦役

V おわりに

I はじめに

筆者はこれまで、一貫してカンタベリ司教座聖堂付属修道院（Canterbury Cathedral Priory, Christ Church）の所領経営の実態分析に従事してきた。これまでの研究は、主として直営地における穀物生産の諸側面、具体的には、穀物生産の推移や耕地利用のパターン、労働力の存在形態などに焦点を当てたものである。

近年の筆者の関心は、直営地労働の主たる担い手であった隷属農民の義務負担の詳細を知ることであり、その成果はすでに、サフォークに所在した2マナー、Monks Eleigh および Hadleigh における隷農

賦役と雇用労働双方の量的変化を論じた論文で明らかにした<sup>1)</sup>。

これらの論文で隷農賦役を取り上げたとはいえ、それは農民個々人の賦役量ではなく、領主が実際に徴収した隷農賦役の総量であった。言い換えれば、マナーの隷属農民が行った賦役の全体量は明らかにしえたものの、個々の農民が負担した賦役の具体的内容については全く触れることができなかったのである。

本稿ではこの点、すなわち農民個々人の義務負担の具体的な姿を「マナー評価簿」Extenta Manerii（以下においてはExtentaあるいは「評価簿」と略称する）を基本史料として明らかにする。この史料も、これまでの研究で利用してきた「荘役会計報告書」Compotus servientis（以下においてはCompotusあるいは「報告書」と略称する）同様、カンタベリ大聖堂付属古文書館（正確にはDean and Chapter Library and Archives of Canterbury, 一般的にはCanterbury Cathedral Archives, 略してCCA）に所蔵されているものである。

本稿が対象とするマナーはMiddleton（「評価簿」および「報告書」ではMiddelstoneあるいはMiddeltoneと表記されている）で、修道院がエセックス・カウンティに所有したマナー群の一つである。

ところで、中世イングランドにおける隷属農民の社会的・経済的状态に関しては、農民賦役に関する叙述を含んだ研究書が数多くあることに加え、Extentaや「慣習帳」Custumal, 「土地調査簿」Surveyのテキストおよびそれを分析した著書・論文がマナー農民個々人の賦役内容を詳細に伝えてくれており<sup>2)</sup>, その実態はかなりの程度明らかになっている。

そうした研究史の現段階において筆者がMiddletonにおける農民の土地保有と義務負担の分析を行うのは、以下の理由による。すなわち、①カンタベリ修道院の他マナーと比べても、課せられた賦役が明らかに軽微であったMiddletonにおける農民の土地保有と義務を明らかにすることで、中世後期におけるイングランドの農村社会の一面を明らかにできると考えるからであり、また、②この作業を抜きにしては、同修道院の所領経営の全体像を明らかにすることが不可能であると考えからである。さらには、③14世紀初頭の一時点における農民の義務負担を記した「評価簿」と、記録の欠けた年度が随所にあるとはいえ、13世紀末葉から14世紀末葉までの1世紀間におよぶ賦役徴収の実態を記す「報告書」を組み合わせることで、それらを別々に分析することで生じる限界をある程度は乗り越えられると考えるからである。

ここでいう「限界」とは、例えば、「評価簿」に内在する現実との乖離という限界である。すなわち、「評価簿」によれば、Middletonでは犁耕賦役や耙耕賦役、さらには畜糞の運搬賦役が一部の慣習保有農民の義務であったが、「報告書」を読めば、そうした賦役が「評価簿」が作成された1309年以前にほとんど金納化されていたことが明らかになる。つまり、「評価簿」から得られる情報が必ずしも現実を反映していないということである。これが「評価簿」の有する限界である。

他方「報告書」は、会計年度ごとに徴収された賦役量と徴収されることなく売却された賦役量は伝えてくれるものの、誰がどのような賦役を行い、あるいは売却したかについては沈黙したままである。これが「報告書」が有する限界である。

これら2つの史料を照らし合わせることでそれぞれの限界の幾分かを乗り越えることができるのではないか、そうした意図も含めて取り組んだのが本研究であり、その可能性を明らかにすることが本稿の第二の目的である。順序が逆になってしまったが、上に述べたMiddletonにおける農民の土地保有と義務負担の実際の姿を明らかにすること、これが第一の目的である。

今回のMiddletonを手始めに、「評価簿」が存在する他の4マナー（同じエセックスのBockingやBorley, Lalling, サフォークのHadleigh）における農民の土地保有と義務負担についても順に論じる予

Mar. 2012

Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Custumarii)

定であるが、Middleton を最初の分析対象としたのは、Middleton と他の 4 マナーの間に保有サイズに関して、次のような大きな相違点が認められたからである。すなわち、Middleton には、極言すれば、標準面積に相当する保有地がなく、保有面積の多様性を反映して負担する賦役の内容もバラバラであったのに対し、他の 4 マナーには標準面積に相当する保有地があり、負担する賦役も保有面積に対応したものであった。つまり、これも極言すれば、保有面積が1/2あるいは1/4であれば賦役も1/2あるいは1/4になるといった具合にである。

Middleton における土地保有と義務負担の実際の姿を明らかにする前に、これら 4 マナーにおける土地保有と義務負担の関係を簡潔に述べておきたい。

Bocking の隷農保有地は、virgata, dimidia virgata, forland, dimidia forland, cotland の 5 種類に分類されている。virgata が週賦役 2 日とその他の賦役を負っていたのに対し、dimidia virgata, forland, dimidia forland, cotland は週賦役 1 日と virgata よりも軽減された他の賦役を負っていた<sup>3)</sup>。

Borley には custumarii と cotmen の 2 種類の隷農が存在した。custumarii の保有耕地はほぼ 20ac., 10ac., 5ac. の 3 種類で、20ac. 保有農は週賦役 3 日とその他の賦役を負っていたが、10ac. 保有農と 5ac. 保有農はそれぞれその 1/2 と 1/4 の賦役を課せられていた。4 名の cotmen は toftum か cotagium の何れかを保有していたが、若干の違いはあるもののそれぞれに週賦役を負っていた<sup>4)</sup>。

Lalling にも custumarii と cotmen の 2 種類の隷農が存在したが、custumarii の 13 保有地のうち 12 が 60ac., 1 つが 30ac. で、前者が 2 日の週賦役とその他の賦役を、後者が 1 日の週賦役と前者よりも軽いその他の賦役を負っていた。7 名の cotmen のうち、保有面積が分かっている 4 名のうちの 3 名は 10ac., 1 名は 5ac. の耕地を保有し、10ac. 保有者の 2 名と 5ac. 保有者 1 名が 1 日の週賦役その他を負っていた<sup>5)</sup>。

Hadleigh には custumarii と mondaylond 保有農の 2 種類の隷農が記録されている。両者とも、保有地面積が記述されていない terra を単位として耕地を保有しており、標準が terra integra で、その半分の dimidia terra, さらにその半分の quarterium terre として耕地を保有していた。custumarii の terra integra は 5 日の週賦役を含む種々の負担を負っており、dimidia terra はちょうどその半分の賦役を課せられていた。quarterium terre だけが週賦役を行わず、耙耕・収穫賦役のみを負っていた。すべてが dimidia terra である 8 つの mondaylond の保有者は、月曜日に行う週賦役 1 日とその他の賦役を負担していた<sup>6)</sup>。

このようにこれら 4 マナーでは、保有する耕地面積が比較的シンプルであり、それを反映して賦役パターンもシンプルであった。さらに言えば、4 マナーのほとんどすべての隷農が週賦役とその他の賦役を負っていた。これに比べると Middleton では、後に見るように、保有耕地面積はバラバラであり、それを反映して負担する賦役の内容もバラバラであったし、週賦役を負担しない農民も多く、賦役そのものが軽微であった。

## Ⅱ 史料について

すでに述べたように、本稿を作成するに当たって使用した史料は 2 種類であり、いずれも CCA が所蔵しているものである。一つは「Middleton マナーの荘役会計報告書」Compotus ×× servientis Manerii de Middelstone (字義どおりには「Middleton マナーの荘役 ×× の会計報告書」) であり、他の一つは「Middleton マナーの評価簿」Extenta Manerii de Middelstone である。後者には「1309 年 6 月 4 日作成」の記述があり<sup>7)</sup>、したがって 14 世紀初頭のマナーの経済的価値を記述したものである。

「報告書」は 1 会計年度分のマナーの経済活動を記したもので、通常、2 枚の羊皮紙をつなぎ合わせ

たものである。表面に「金銭勘定」を、裏面に「穀物勘定」と「牧畜勘定」、さらには（賦役を徴収していたマナーでは）「賦役勘定」を記載するのが、カンタベリ修道院のやり方である。CCAには、多寡を別にすれば、修道院がイングランド南東部を中心に所有した60を数えるマナーのほとんどについて「報告書」が残されており、マナー経営の分析を可能にしている。

「評価簿」は、調査年度におけるマナー資産（直営耕地、粉ひき小屋、牧草地、放牧地その他の付属財産・権利等）の規模とその評価額に加えて、農民個々人が保有する耕地の広さと彼らが負っていた貨幣地代や週賦役等の保有条件を記したものである。修道院がケント以外のカウンティに所有した20を超えるマナーのうち、このような内容の「評価簿」が残されているのは、CCAの史料目録から判断する限り、Middletonと上に述べた4マナーのわずかに5マナー分である。

ところで、CCAには2種類の「評価簿」が存在する。1つはRegister Bに、他の1つはRegister Kに含まれているものである。Registerは、特許状や土地の売買記録、裁判記録など多岐にわたる文書類を集めたもので、文字どおりの『記録簿』あるいは『文書集成』である。

Register Kの中の「評価簿」は独立した文書として扱われているのに対し、Bのそれは、Middletonを例にとれば、「マナーの寄進」Donacio Manerii de Middiltonや「ドームズデイ調査」Domisday domini Regis（以下においては「ドームズデイ-ブック」またはDBと表記する）の写しその他の後にExtentaが記述されている<sup>8)</sup>。それゆえ、Kに記載された「評価簿」はBに記載された項目の一部分ということになる。

このような事情を考慮すれば、本来ならRegister B記載の「評価簿」を分析すべきであるが、以下の理由からK所収のものをを用いた。すなわち、記述内容から年代を特定できる「マナーの寄進」「ドームズデイ-ブック」以外の項目について、それらがどの年度のものかが特定できず、Bのものをいう積極的な理由が存在しないため、また、これが決定的な理由であるが、Middleton以外のマナー分も含めて2つの「評価簿」を比較すると、空白部分や明らかな誤記と思われる記述がB記載のものにより多く見られるためである。

以上の理由で本稿はRegister K所収の「評価簿」を基本史料として作成するものであるが、Bのそれとの相違点は、文字の省略方法の違いを除けば<sup>9)</sup>、数値や人名に幾つかの違いが見てとれるだけである。これについては、CCAの許可を得た上でAppendixとして掲載したKのfull-transcription（単語の省略部分を補って完全な文章にしたもの）を見ていただければ一目瞭然である。

### Ⅲ マナーおよびマナー経営の概要

#### 1. マナーの概要

##### 1) 所在

Register BおよびK所収のExtentaでMiddelton'と表記されたMiddletonは、John Morrisを代表者として編集・発行された11世紀後半の「ドームズデイ-ブック」のテキストでは、ラテン語でMildentuna、英語でMiltonと表記されている<sup>10)</sup>。なぜDBのMildentunaがExtentaでMiddelton'と表示されるようになったのかは不明であるが、記載内容から判断すれば、MildentunaとMiddelton'は同一のマナーである<sup>11)</sup>。

DBのテキストでMildentuna（英語名Milton）と記されたマナーは、1800年代に作成された古地図ではMilton Hallと記されており<sup>12)</sup>、したがって、CCAが所蔵するExtentaおよびCompotus servientisシリーズにおいてMiddelton'と表記されたMiddletonは、現在のMilton Hallに存在したマナーということになる。

Mar. 2012

Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Customarii)

エセックスの Rochford Hundred に属したかつての Milton Hall したがって Middleton は、現在の Southend on Sea 市にその名を残しており、テムズ川が北海に流れ込む河口近くに位置するマナーであった。

## 2) 保有農民数

Register B 中の DB の写しによれば、Middleton には2ハイドの耕地と、領主と農民の犁がそれぞれ2台と6台、農民が23名(奴隷 *sevus* 1名を除き、8名の *villani* と15名の *bordmanni*) が存在した<sup>13)</sup>、すでに述べた Bocking や Lalling に比べると、ハイド数・農民数・犁の数いずれにおいても小規模なマナーであった<sup>14)</sup>。このためもあつてか、「報告書」の記述から判断すれば、近隣の Southchurch マナーとともに同一の荘役のもとで経営されていた<sup>15)</sup>。

このように、11世紀末の Middleton には農民が23名存在したのであるが、14世紀初頭に作成された「評価簿」に登場する農民の数は、夫婦による共同保有を1名とカウントして、自由農 *libere tenentes* が9名、慣習保有農 *customarii* が33名の合計42名である<sup>16)</sup>。

したがって Middleton では、DB から Extenta の作成時期までのおよそ220年の間に、保有農の数がほぼ倍増したことになる。これは、このマナーでも12・13世紀に人口が大幅に増加し、土地に対する需要が大きかったことを示すものであろう<sup>17)</sup>。

## 2. マナー経営の概要

CCA には裁判所記録がほとんど残されておらず、「報告書」がマナー経営の具体的な姿を知る上で唯一の史料といっても過言ではない。以下はこの「報告書」の分析から得られたものである。

マナー経営を概観する場合、本来であれば穀物生産と牧畜の両者について触れなければならないのであるが、本稿のテーマであるマナー農民の土地保有と義務負担の観点から言えば、牧畜経営はほとんど無関係である。このためここでは、穀物生産と、保有農とともにそれを担ったファムルスについてのみ概要を述べる。

### 1) 穀物生産

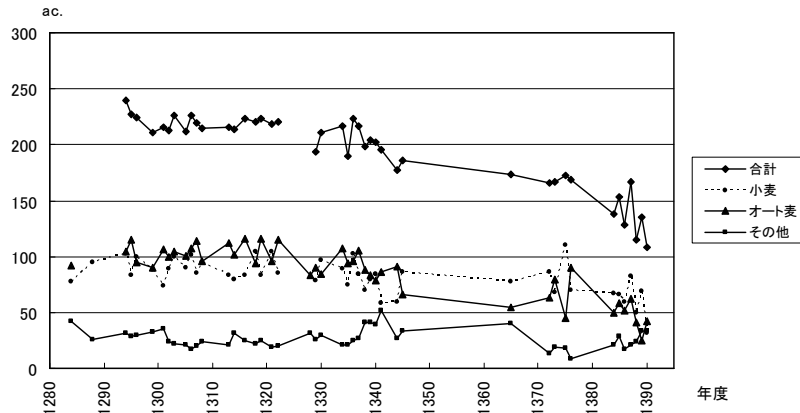
Extenta の「直営地」項目によれば、このマナーには合計で380 $\frac{1}{4}$ ac. の直営耕地があつた<sup>18)</sup>。改めて記す必要のないことではあるが、そのすべてで毎年作物が栽培されたわけではない。どのような耕地制度あるいは耕地利用の方法を採用していたかは判然としないが、史料で確認できる時期の最大作付面積は1293-94年の239 $\frac{1}{4}$ ac. であり、耕地全体の三分の二を上回って作付されることはなかった。

栽培された作物は、小麦 *frumentum*、ライ麦 *siligo*、大麦 *ordeum*、オート麦 *avena*、小麦とライ麦を混ぜ合わせたマズリン *mixtilium*、大麦とオート麦を混合したドレッジ *dragetum* の6種類の麦と、エンドウ *vesca*、ソラマメ *faba* の2種類の豆である。

このうち、途切れることなく、また、最も多く栽培されたものが小麦とオート麦である。これに続くのがライ麦と豆類であるが、その差は余りにも大きく、小麦とオート麦が主穀であつた。大麦とマズリン、ドレッジは、折に触れて栽培されたにすぎず、量的にも最も重要度の低い作物であつた。

主穀の小麦とオート麦、主穀以外の麦類と豆類を一括りにした「その他」および総作付面積を示したものが図1である。これと「報告書」から得られたデータを用いて穀物生産の推移を概観する。

図1 播種面積



トータルでみると、 $239\frac{1}{4}$ ac. を記録した1293-94年を頂点としてその後は漸減し、1340年以降はその傾向に拍車がかかって1389-90年には最低の108ac. にまで落ち込んでいる<sup>19)</sup>。また、1336-37年までは210ac. 以上の播種がほぼ常態であったのに対し、これ以降は、1338-39年の204ac.、1339-40年の202ac. を最後に200ac. を超える作付けはみられなかった。それゆえ、考察対象時期に限定して言えば、このマナーでの穀物生産のピークは1330年代までであったことになる。

主穀の小麦、オート麦の合計面積からも同じことが言える。すなわち、1336-37年までは合計が190ac. を超えることが普通であったのに対し、それ以降は170ac. を超えることがなく、1380年代にはほぼ120ac. 以下にまで落ち込んでいるからである。

以上の結論を前提にすれば、Extenta が作成された1309年は穀物生産が活発だった時期にあたる。

## 2) 雇用労働

一般に、マナーの経営は隸農賦役とファムルス *famulus* の労働に依存して行われた。Middleton でも事情はまったく同じで、犁耕その他の主要な農作業の多くはファムルスと呼ばれる年雇用あるいは季節雇用の労働者によって担われている。

「報告書」に登場するファムルスは、数年間のみ現れるものを除けば、以下のとおりである。その半数は穀物生産が縮小に転じた1340年代以降に姿を消すが、いくつかの職種については考察対象全期間を通じて雇用されている。

全期間を通して姿を見せるのは犁耕夫 *carucarius* と荷馬車引き *carectarius*、羊飼 *bercarius* であり、1340年代まで継続して雇われていたのは牝牛番 *vaccarius* とマナー館の女中 *ancilla domus*<sup>20)</sup>、子羊番 *custos agnorum*、家畜番 *custos animaliorum*<sup>21)</sup>、収穫夫 *furcarius*、収穫監視人 *messor*、鳥追 *garcio fugans aves de blado* である。

これらについて雇用期間と人数を記すと、最も数が多かったのは年雇用の犁耕夫で、1372-73年に2名になるまで常に4人が雇用されていた<sup>22)</sup>。荷馬車引きや羊飼、牝牛番、マナー館の女中はいずれも1名で、年間を通じて雇用されている<sup>23)</sup>。子羊番、家畜番、収穫夫、収穫監視人 *messor*、鳥追はいずれも1名で、すべて季節雇用であった。

年間雇用の犁耕夫その他がファムルスの中核であったことは言うまでもないが、賦役との関係でいえば、穀物生産のピークが過ぎた1340年代になっても4名の犁耕夫が維持されていたことは興味深い。後に見るように、領主は保有農の耕地を犁耕 *arrura* することで現金収入を得ており、このために維持さ

Mar. 2012 Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Custumarii)

れたものと考えられるからである<sup>24)</sup>。

Ⅳ 14世紀初頭における農民の土地保有と義務負担

「評価簿」に現れる農民が自由保有農と慣習保有農の2種類のみであることは、すでに述べたとおりである。後者が賦役を課せられた隷属農民であることは言うまでもない。以下、自由農民について簡潔に記した後、慣習保有農民の保有規模とそれに関わる地代や賦役の負担を考察する。

1. 自由農民の土地保有と義務負担

表1は、本稿の末尾にAppendixとして掲載したExtentaから、自由保有農の氏名・保有資産の内容・貨幣地代額その他を抜き出して表にしたものである<sup>25)</sup>。

表1 自由農の保有資産と義務

参照番号	保有者	保有資産	貨幣地代	現物地代	出廷義務	以前の保有者
L1-1	①Nicholaus de Haverying'	Margariaの相続地	6s.	—	○	Henricus Grapinel
-2	②Margaria vxor eius	保有地1(面積等?)	13s. 4½d.	—	○	Henricus de Plumbergh'
-3		耕地30ac.、湿地1(面積?)	3s. 10d.	—	○	Iohannes le Carpent'
L2	Laurentius le Porter	耕地60ac.	10s.	—	○	—
L3-1	Willelmus Potin	耕地5ac.	3s.	雌鶏1羽	—	—
-2		耕地½ac.	4d.	—	○	Warinus filius Ranulphi
L4	Iohannes Huwes	耕地4ac.	1s. 6d.	—	○	Hugo filius Gilberti
L5	Iohannes Goldston	耕地7ac.	4s. 8d.	—	○	—
L6	Willelmus Haddock'	耕地4ac.	2s. 7d.	—	○	—
L7	Iohannes Rolfe	耕地6ac.	3s. 11d.	—	○	Emma de Bosco
L8	Bartholomeus de Mockyng'	耕地1ac.	8d.	雌鶏1羽	—	Emma de Bosco
L9	Turtle atte Cruche	耕地1(面積?)、屋敷地1	7d.	—	—	—

1) 保有農の数

参照番号L1のNicholausとMargariaの夫妻を1人としてカウントすれば、全部で9名の自由農が存在する。現在と過去の保有者名が異なっている例が多いことから判断すれば、9名の保有農の多くが父祖代々の土地や屋敷地を受け継いだのではなく、譲渡や売買によってそれらを獲得したものであろう。

以前の保有者名が記された7例のうち、明らかな譲渡・売買を示す文言がみられるのはL3-2のみであるが<sup>26)</sup>、後述するように、慣習保有農の場合もほとんどが新旧の保有者名を記しており、このマナーでは、現在の保有者が父祖代々の土地や屋敷地を連綿と受け継いできたというよりは、保有農の交代が一般的であったように思われる。

2) 保有規模

保有地面積をみると、参照番号L1のNicholaus夫妻と、60ac.を保有するL2のLaurentius le Porterのみが30ac.を超える耕地を保有している。L1の夫婦が30ac.の耕地以外に、いずれも面積不詳の妻の相続地 hereditas Margarie と1保有地 tenementum, 湿地の1区画 pecia marisci を保有していることを考慮すれば、L1とL2の保有者は富裕な農民であったといえよう。これに対してL3以下の農民は、すべて7ac.以下の耕地しか保有しておらず、自由農内部での格差が大きかったことを示している。

小保有地しか持たないこのような自由農はどのようにして生活を維持したのであろうか。隷農地を保有することも手段の一つであるが、L9のTurtle atte Crucheのみが耕地付きの家屋——地代額からみて

恐らくは小耕地片——を保有していたにすぎず、L3の Willelmus Potin ~ L8の Bartholomeus de Mockyng' の6名は自由保有地以外の資産をまったく保有していない。

このマナーには彼らの多くを雇用してくれるほどの大規模保有農が見当たらないことからすれば、ニガイ漁で生計を立てていたとか<sup>27)</sup>、あるいは毛織物などの副業を営んでいたとか、近隣のマナーで雇用先を見つけたり小作地を得たりして生活を維持していたとか、さまざまなケースを想起することは可能であるが、いずれも想像の域を出ない。

### 3) 裁判所への出廷義務

自由農民は、貨幣地代と現物地代を納めたほか、裁判所への出廷義務を負っていたが、このマナーでも自由農と慣習保有農の双方が参加する裁判が「3週ごとに」de iij septimanis in iij septimanas 開かれている<sup>28)</sup>。裁判所は、国王の役人が不在の場合は領主の役人 ballivus によって開かれたが、その場で死亡税 herietum や相続上納税 relevium などを徴収する重要なビジネスの場でもあった<sup>29)</sup>。

裁判所への出廷は、自由農であれ隷農であれ、領主裁判権に服していた保有農全員の義務であったと考えられがちであるが、このマナーではL8の Bartholomeus de Mockyng' とL9の Turtle atte Crouche のように出廷の義務を有さない自由農が存在しており、裁判所への出廷が必ずしも保有農の義務ではなかったことを示している。

出廷の義務が属人的なものでなく、特定の保有資産と結びついた属物的なものであることは、3種類の資産すべてにおいて出廷の義務を負うL1の Nicholaus と Margaria の夫婦の例および2種類の耕地のうち一方だけに義務を伴うL3の Willelmus Potin のケースが如実に示している<sup>30)</sup>。

## 2. 慣習保有農民の土地保有と義務負担(1)

Appendix の Extenta から、慣習保有農の氏名と保有資産の内容、貨幣地代額、出廷義務の有無、賦役のタイプその他について要約したものが表2である。単独保有が26例、夫婦によるものも含めて共同保有が10例、合せて36組の組み合わせが示されている (C17とC30は同一人4名の保有)。

### 1) 保有農の数

3組の夫婦を3名としてカウントすると、隷農地に保有地を持つ農民は35名、このうち2名(C4の Nicholaus 夫妻とC34の Turtle atte Cruche) が自由保有農であったから、隷農の数は33名になる。

ここでも多くが現在の保有者と以前の保有者が異なっている。48の資産のうち94%に当たる45例が新旧の両保有者名を記述しており、12例中の7例(58%)の自由農よりもはるかに高い割合で移転が行われている。このうち、夫からの相続が1例(C33)、息子から受け継いだ可能性のある2例(C2-2, C7)、家族間での移転の可能性を否定できない3例(C21-1, C21-2, C26-1)を除いた42資産が、家族以外あるいは血縁関係の薄い保有農間での移転であると考えられる。

移転の形態であるが、売買による移転が明らかなものはC2-3, C2-4, C14-4, C26-2の4例である。この4例と相続の可能性のある6例を除いた残り38例については明確なことは言えないものの、13世紀から14世紀にかけて人口が増加し、土地に対する需要が高かったことを考慮すれば、そのほとんどが購入によって得られたものであると考えるべきであろう<sup>31)</sup>。

### 2) 保有規模

「保有資産」の欄から指摘できる第1のポイントは、保有される単位耕地の多様性である。それらは1ac.未満から30ac.まで様々で、その多くが本来の賦役地からの分割を重ねてこのようになったと考えられるが、このことが賦役内容の多様性の原因になっている。

保有単位が多様であるばかりでなく、その多くが5ac.以下の小規模なものであるため、保有農の多くが零細な農民であることを予想させる。



Mar. 2012

Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Customarii)

表2 慣習保有農の保有資産と義務負担

参照番号	保有農	保有資産	貨幣地代	現物地代	出廷義務	賦役	以前の保有者
C1	Iordanus le Skynnere	耕地 3ac.	1s. 8d.	雄鶏2	○	タイプ①	Willelmus Sprot
C2-1	Iohannes Hugnes	耕地 2 1/2ac.	4d.	—	○	タイプ①	Petrus Hardewyne
-2		耕地 40ac.	9s.	雌鶏2、卵40	○	タイプ②+荘役・粉ひき	Willelmus f* Hugonis
-3		耕地 1(面積?)	6d.	—	—	—	Richardus Mercator ←Willelmus f* Hugonis
-4		耕地 1(面積?) <sup>(注1)</sup>	1 1/2d.	—	—	—	Richardus Mercator
-5		耕地 1(面積?)	1d.	—	—	—	Iohannes de Dychenyngg', Emma vxor eius
-6		耕地 1ac.	3d.	—	—	—	—
C3	Robertus Shonke	耕地 5ac.	10d.	雌鶏1、卵10	○	タイプ③	Robertus Brun
C4	① Nicholaus de Havering' ② Margaria vxor eius ③ Robertus dil Temese ④ Matilda vxor eius	耕地 15ac.	2s. 8d.	雌鶏2、卵15	○	タイプ④+荘役・粉ひき	Walterus Panyard
C5	Iohannes f* Ricardi le Wise	耕地 20ac.	3s. 4d.	雌鶏2、卵20	○	タイプ⑤+粉ひき	Warinus le Wise
C6	① Iohannes le Wise ② Alicia Hugnes	耕地 7ac.	1s. 4d.	雌鶏1、卵7	○	タイプ⑥+粉ひき	Henricus atte Cruche
C7	Iohannes Martyn	耕地 8ac.	2s.	雌鶏1、卵8	○	タイプ⑦	Willelmus f* Martini
C8	Coleman Potyn	耕地 5ac.	1s. 8d.	雌鶏1、卵5	○	タイプ⑧	Beatrix de Campo
C9-1	Iohannes Seeman	耕地 5ac.	2s. 4d.	雌鶏2、卵5	○	タイプ⑨	—
-2		屋敷地 1	8d.	—	—	—	Iordanus Scose
C10	① Gilbertus f* Laurencii atte Feld ② Iohannes le Wise ③ Matilda Mulet ④ Willelmus Tepe	耕地 12ac.	4s.	雌鶏1、卵10	○	タイプ⑩	—
C11	① Iohannes le Clerk' ② Iohannes le Neweman	耕地 30ac.、屋敷地2	10d.	雄鶏1 <sup>(注2)</sup> 雌鶏3、卵30	○	タイプ⑪	Iordanus de Middeltone
C12	Iohannes le Clerk'	耕地 7ac.	1s. 10d.	—	—	タイプ⑫	Iordanus de Middeltone
C13	① Iordanus Skote ② Philippus Alevn	耕地 30ac.、屋敷地1	10d.	雌鶏4、卵30	○	タイプ⑪	Pyrrman et Brungor
C14-1	Iordanus Skote	耕地 10ac.	3 1/2d.	—	○	タイプ⑬	—
-2		耕地 2ac.	4d.	—	—	—	Iohannes Turtle
-3		耕地 2ac.	2d.	—	—	—	Agneta r* Warini Randolf'
-4		耕地 1ac.	1d.	—	—	—	Stephanus Potyn
C15	① Iohannes Skote ② Matilda Treppes	耕地 10ac.、屋敷地1	3 1/2d.	卵10、雌鶏1.5、 犂の刃0.5 <sup>(注3)</sup>	○	タイプ⑬	—
C16	Adam Orgor	耕地 15ac.、屋敷地1	—	雌鶏2、卵15	○	タイプ⑭	Iohannes Orgor (pater Ade)
C17	① Ricardus le Kartere ② Iohannes Waryn ③ Iordanus Skote ④ Serlo le Neweman	耕地 5ac.	4d.	雌鶏1、卵5	○	タイプ⑮	Beatrix le Halte
C18	Iohannes Waryn	耕地 1ac.	—	雌鶏1、卵1	○	タイプ⑯	Gilbertus le Parmenter
C19	Iohannes f* Iohannes le Hirde	耕地 5ac.、屋敷地1	3d.	雌鶏1、卵5	○	タイプ⑰	Gilbertus Skelle
C20	① Iohannes f* Iohannes le Hirde ② Lytelwyf vxor eius	耕地 9ac.	3s.	—	—	タイプ⑱	Rogerus Gentilicors
C21-1	Beatrix le Neweman	耕地 5ac.、屋敷地1	1s.	雌鶏1、卵5	○	タイプ⑰	Gilbertus le Neweman
-2		耕地 1 1/2ac.	4d.	—	—	—	Hamo filius Gilberti
-3		耕地 1ac.	9d.	雄鶏2	—	—	Radulfus le Tailleour
C22	Alanus Tutebouth	耕地 2ac.	6d.	—	—	—	Radulfus Cose
C23	① Gilbertus le Neweman ② Iohannes Potyn	耕地 1(面積?)	1s. 3d.	—	—	—	Ricardus filius Gilberti
C24	Iohannes atte Felde	耕地 1 1/2ac.	1 1/2d.	—	—	—	Iohannes Godebright
C25	Serlo le Neweman	耕地 1(面積?)	3d.	—	—	—	Thomas ate Forde
C26-1	Iacobus le Neweman	耕地 1(面積?)	1d.	—	—	—	Robertus le Neweman
-2		耕地 1(面積?)	8d.	犂の刃 1	—	—	emit de terra Iordani*
C27	Iohannes Iacob	?	—	犂の刃 1	—	—	Iacobus le Mazum ?
C28	Iohannes Chapman	屋敷地 1	1s.	—	—	—	Alfgarus de Hadlee
C29	Henricus Picot	耕地 1(面積?)	1 1/2d.	—	—	—	Walterus le Brasur
C30	① Ricardus le Cartere ② Iordanus Skote ③ Serlo le Neweman ④ Iohannes Waryn	耕地8 1/4ac. 3dw.* + 屋敷地 1	8d.	雌鶏1、卵8	○	タイプ⑰	Robertus filius Iordani*
C31	Iohannes Waryn	耕地 2ac.	9d.	—	—	—	Nicholaus Prisman ← Robertus filius Iordani
C32	Iohannes le Noreys	耕地 1ac.	1d.	—	—	—	Ranulphus Cocus ← Samuel atte Feld'
C33	Alicia Hugnes	保有地 1(面積?)	1s.	—	—	—	Alexander Hugnes suus vir ← Robertus Iurdon*
C34	Turtle atte Cruche	耕地(面積?)付きの家屋	11d.	—	—	—	Hugo le Driver← Iohannes Silok'← Samuel ate Felde
C35	Iacobus f* Serlonis le Neweman	保有地 1(面積?)	9d.	—	—	—	Iohannes Orgor (p* Ade Orgor)
C36	Thomas le Neweman	耕地 3deywerka	2d.	—	—	—	Elias vaccarius ← Stephanus Potyn

備考) \* を付した「保有者」項目の中の f, r, p, および、「保有資産」項目の中の dw はそれぞれ, filius, relict, pater, daywerca の略である。

注) (1) quadam acram terre と数値を伴わない単数形であるため、耕地 1 (面積?) とした。以下同じ。

(2) 他の個所では「雄鶏」を capo と表現しているが、ここで初めて現れた gullum も「雄鶏」と訳した。

(3) 雌鶏は 1 羽と 2 羽を交互に納めるので 2 年で 3 羽になり、犂の刃は隔年で 1 つの納付である。

C1～C36の保有単位で見ると、耕地面積が30ac.以上を保有しているのはC2, C11, C13の3例、20ac以上30ac未満に属するものがC5の1例のみである。他はいずれも15ac.未満であるが、15ac.のC14とC16を除けば、30例(83%)が10ac.未満であり、大部分が小土地・零細保有農になる。

最大の耕地を単独で保有するC2のIohannes Hugnesはこれ以外に保有地を持たないものの、保有農の多くは、共同であるいは単独で、他の場所にも資産を保有している。例えば、単独で20ac.(C5)を保有するRicardus le Wiseの息子Iohannesは、Alicia Hugnesと2人で7ac.(C6)、3名の仲間と一緒に12ac.(C10)を保有しており、C14のIordanus Skoteは、単独保有の15ac.(C14)以外に、3人の仲間と共同で5ac.(C17)と8¼ac. 8daywork(C30)の耕地を保有している。単純に共同保有分を人数で割って合計しても、Iohannes le Wiseは26½ac., Iordanus Skoteは19ac.程度に過ぎない。この2人以外の、複数の単位に耕地を持つ保有農の耕地面積はさらに少なく、保有規模の小ささを際立たせている。

ついでに言えば、自由農による隷農地保有もわずかであるが見られる。L1のNicholausとMargariaの夫婦が他の1組の夫婦と共同で15ac.(C4)を保有し、L9のTurtle atte Crucheが小耕地片の付いた屋敷地(C34)を保有している。Nicholaus夫妻はこの保有に対して賦役を負っており、裁判所への出廷義務同様、賦役も属人的ではなく属物的であったことを示している。

自由保有地で30ac.以上、貨幣地代額から判断すれば、恐らくは50ac.以上の耕地を保有していたNicholausとMargariaの夫妻が賦役地にまで保有地を確保していることは、保有農の間に存在した土地需要の大きさを雄弁に物語ると同時に、自由農にとっても隷農地保有が利益のあったことを示す格好の例であろう<sup>32)</sup>。

### 3) 裁判所への出廷義務・貨幣地代額

裁判所への出廷義務：全部で48資産のうち、出廷義務を負っているのは21の耕地であるが、これらすべては賦役を課せられた耕地(以下、賦役地)である。賦役地であるにもかかわらず出廷の義務を伴っていないのはC12とC20のわずか2例である。

この2例のみがなぜ出廷の義務を負っていないのかは不明であるが、賦役を伴う耕地23のうち21例(91%)が出廷の義務を負っていること、マナーにとって賦役地を保有する農民の役割が極めて重要であったことから判断すれば、これら23賦役地が本来の隷農保有地であり、それ以外は、賦役地の分割・細分化や開墾等によって獲得されたものであり、その結果として出廷と賦役の義務を免れていたと考えることもできよう。この仮定が正しいとすれば、自由農の個所でみた出廷義務を負う耕地のみが本来の自由保有地であったことになる。

貨幣地代額：面積が明示された耕地と地代額の間関係を見ると、表から判断する限り、何か明確な基準があったかどうかは判然としない。例えば、同一内容の賦役を負っているC1の3ac.とC2-1の2½ac.を比較すると、前者は1ac.当たり6⅔d.(ペンズ)で、後者は1⅓d.である。また、賦役内容に若干の違いはあるものの全体としての負担に大きな差がないC5の20ac.とC10の12ac.を比べると、前者は1ac.当たり2d.で、後者は4d.である<sup>33)</sup>。

このようにエイカー当たりの負担額が多様であるため、地代の算定基準については何も言えないのであるが、次のことだけははっきりしている。すなわち、週賦役を課せられた保有地(C11, C14-1, C16, C21-1, C30)のエイカー当たりの地代額が低いことである。

エイカー当たりの地代額は、次に見るように、週賦役に加えて犁耕や耙耕を行うC11とC14-1がそれぞれ⅓d., ⅓d.強であり、C16にいたっては0である。最も高かったのは5ac.の耕地と屋敷地1を保有するC21-1であるが、屋敷地分を含めても2⅔d.にすぎない。

1日当たりの賦役の評価額が内容によっては明示されないこともあって、これ以上の比較は不可能であるものの、重い負担を課せられた賦役地の方が地代額が少なかったことだけは確かである。

Mar. 2012

Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Custumarii)

### 3. 慣習保有農民の土地保有と義務負担(2): 賦役

隷農保有地であっても賦役の負担がなく、貨幣および現物での地代支払いのみの耕地がいくつか見られる。上で仮定したように、これらは本来の賦役地から分割されたものか、あるいは、開墾その他によって後に獲得されたものである。賦役の実態を明らかにすることが本稿の目的であるため、以下においてはこれらを除外し、賦役地、すなわち、表2の賦役欄にタイプ①～⑩を付した合計23の賦役地についてのみ言及する。

すでに述べたように、Bocking や Borley, Lalling, Hadleigh では、保有規模が数種類に限られており、賦役内容もほぼ保有規模に連動していた。その場合、それぞれの規模における賦役の標準モデルが記載され、同じ規模の保有地であればそれぞれのモデルに準じた賦役を行う、というように記述するのが一般的である。

Middleton の場合、そのような一応のモデルは存在するものの、表2で明らかなように、賦役地の面積が多様であるため、23賦役地のうち同一の賦役を行うものがC1とC2-1, C11とC13, C14-1とC15, C19とC21-1の4例しかない。このため、23賦役地すべての内容を記すためには19通りもの説明スペースを要することになる。

19のタイプがあるとはいえ、わずかな違いしかないものが多い。そのためここでは、週賦役を負わない賦役地のモデルとしてC4(タイプ④)を、週賦役を負うモデルとしてC11(タイプ⑩)を取り上げ、いささか煩雑ではあるが、それぞれの賦役にかかわる部分を中心に意識する。

★週賦役を負わないタイプの一例C4: «Nicholaus de Havering」とその妻 Margaria および Robertus dil Temese とその妻 Matilda は、かつて Walterus Panyard が保有していた15ac. を保有している。-----。彼らは収穫期に3日間穀物を刈り取らねばならない。-----。1日分の刈り取りを行った翌日には、領主からの食事の提供なしで、それぞれ小麦またはオート麦を $\frac{1}{2}$ ac. 刈り取らねばならない。

また、それらを束ね、運搬までのすべての準備を行わねばならない。また、1年に2メンスラの小麦かライ麦を脱穀しなければならない。1メンスラの量は上に述べた通りであり、脱穀の評価額も上に述べた通りである。

そして彼らは、領主の求めに応じて、舟で穀物その他を運搬しなければならないが、小麦の場合は重量で $\frac{1}{2}$ q. (クオーター)、オート麦の場合は1q. を運ばねばならない。この運搬については他の慣習保有農が2度運ぶ場合でも1度でよい。また、Middelstone の穀物倉の入り口から Melneflete まで運搬賦役を行わねばならない。この場合、 $\frac{1}{2}$ q. の小麦または1q. のオート麦を5回運ばねばならない。その場合の賦役の評価額は1d. である。また、舟で Stratende まで運搬する場合は3回で1d. である。以下のことを告知する。すなわち、何かを運ぶために召喚された場合は常に領主の求めに応じてそれを運搬しなければならないが、その場合、他の慣習保有農が2回運ぶ場合でも1回でよい。

また、Robertus Shonke のように、領主の羊の毛を刈る手伝いをしなければならないし、領主の粉ひき小屋で粉を挽かねばならない。また、荘役の職務を果たさねばならない。また、裁判所へ出廷しなければならない。》

以上が、週賦役を課せられていないC4のNicholaus 夫妻と Robertus 夫妻が共同で保有する15ac. の耕地に負わされた賦役の内容である。このタイプ④が最も多様な仕事を負っており、タイプ①～⑩は④の作業から一部を減じた内容になっている。

タイプ④の仕事の一部を減じた上で新たに週賦役や犁耕・耙耕賦役が加わったものが、タイプ⑩である。以下、C11の賦役部分を意識する。

★週賦役を負うタイプの一例C11: «Iohannes le Clerk」とIohannes le Neweman は領主から2つの屋敷地と30ac. の耕地を保有しているが、これらはIordanus de Middelstone が保有していたものである。

-----。そして彼らは、領主からの食事の提供なしで、ミカエルマスからクリスマスまでの間に領主の耕地2ac.を耕し、かつ耙耕しなければならない。また、クリスマスからイースターの間に領主の耕地2ac.を耕し、かつ耙耕しなければならない。これら4ac.の犁耕と耙耕の評価は2s.(シリング)である。上に述べたミカエルマスからイースターまでの間に行われる犁耕と耙耕に対して、マナーの慣習により4日(の賦役)が控除される。また、もしクリスマス以降に領主の犁がオート麦畑を犁耕しただけで、耙耕しなかった場合には、2人のIohannesは自身の馬と馬鋤でその畑を1日に1ac.耙耕しなければならない。また、領主の犁が作業をしている間は、領主の馬鋤と彼らの4人の仲間の馬鋤で1日に1ac.を耙耕しなければならない。そのように耙耕を行った日はすべて、賦役日として控除される。

そして、収穫期には3日の御礼賦役日に、それぞれ2名で刈り取りを行わなければならない。-----。これ以外に、領主の穀物が刈り取られないまま残っている場合には、祭日を除いて、1日に小麦かオート麦を $\frac{1}{2}$ ac., 大麦の場合は1virgata(= $\frac{1}{4}$ ac.)を刈り取らねばならない。これらの作業には領主から食事は提供されない。また、刈り取られた穀物をすべて束ねた上で運搬までのすべての作業を迅速に行わねばならない。

収穫の終わってから翌年の収穫の始まりまでの間、賦役をなすべき週には、慣習により5賦役を行わなければならない。賦役として穀物を脱穀する場合、他の慣習保有農が脱穀する際の単位であるメンスラ分の小麦かライ麦を脱穀しなければならない。

また、土の掘り起こしや他の同様の作業をする場合には早朝から正午まで働かねばならない。そして、収穫の終了から翌年の収穫の開始までの全期間を通じて、賦役が免除される祭日を除き、そのように働かねばならない。

また、ミカエルマスからイースターまでの間の4ac.の犁耕に対して4賦役が控除されるように、クリスマスからイースターまでの期間に播種前のオート麦畑で耙耕を行えば、慣習によりすべての作業日が賦役日としてカウントされる。

さらに、領主からの食事なしで、3メンスラの小麦またはライ麦を脱穀しなければならない。-----。また、領主の家畜の糞を年に1度、畑まで運ばねばならない。この場合、慣習により荷車10台分の運搬で1賦役日とカウントされる。

また、召喚されるたびにCrekeshech'まで運搬賦役を行わねばならないが、この場合、小麦 $\frac{1}{2}$ q.を単位として運搬ごとに1賦役日とカウントする。もし舟でStrateshondeまで運ぶ場合は、 $\frac{1}{2}$ q.の小麦を3回運んで1賦役、Mellefleteまでの場合は5回で1賦役とする。-----。》

以上が、週賦役を課せられたC11の慣習保有農、Iohannes le Clerk'とIohannes le Newemanの2名が共同保有する30ac.の耕地に負わされた賦役の内容である。

C4, C11以外のタイプも含めて賦役の負担内容を一つにまとめたものが表3である。

上に記した意識文によって作業内容の具体像の一端を示したが、表3の作業項目のうちコメントを付すべきであると思われるものについて、簡潔に記したい。

【収穫】農作業の中でも最も重要な仕事の1つであり、様々な形で労働を徴収していた。

収穫(1)は御礼賦役bedrepeであり、1日に2回の食事が付いた作業である。①以外のすべてのタイプが3日の賦役を負っていることから推測できるように、このマナーでは御礼賦役は3日であった。多くは保有農1名が刈り取りに従事すればよかったが、中には2～4名で作業しなければならない賦役地も見られる。

収穫(2)は、収穫(1)を行った翌日に課せられた食事なしの作業である。 $\frac{1}{4}$ ac.を基準として、その複数倍の賦役を、1日あるいは3日にわたって行うものである。

収穫(3)は、定量的な収穫賦役(1)と(2)が終了した後に直営地に穀物が刈り取られないまま残っている場

表 3 賦役の内容

	収穫(1)	収穫(2)	収穫(3)	束ね・積込	脱穀	穀物の運搬	剪毛補助	犁耕＋耙耕	犁耕のみ	耙耕のみ	週賦役	その他
タイプ①	1.5日	<sup>5</sup> / <sub>8</sub> ac	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—
タイプ②	3名×3日	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac×3日	—	—	6 bushel	—	—	—	—	—	—	粉ひき・荘役
タイプ③	3日	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac×3日	—	—	2 bushel	—	○	—	—	—	—	—
タイプ④	3日	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac×3日	—	○	4 bushel	M*, S*	○	—	—	—	—	粉ひき・荘役
タイプ⑤	3日	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac×3日	—	—	4 bushel	M*, S*	—	—	—	—	—	粉ひき
タイプ⑥	3日	<sup>1</sup> / <sub>4</sub> ac×3日	—	—	2 bushel	—	—	—	—	—	—	粉ひき
タイプ⑦	3日	<sup>1</sup> / <sub>4</sub> ac×3日	—	—	2 bushel	—	○	—	—	—	—	袋詰め
タイプ⑧	3日	—	—	—	2 bushel	—	○	—	—	—	—	袋詰め
タイプ⑨	3名×3日	—	—	—	2 bushel	—	○	—	—	—	—	—
タイプ⑩	4名×3日	—	—	—	2 bushel	—	○	—	—	—	—	袋詰め
タイプ⑪	2名×3日	—	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac or <sup>1</sup> / <sub>4</sub> ac <sup>(注1)</sup> : 日数不定	○	6 bushel	C*, M*, S*	—	2ac + 2ac <sup>(注2)</sup>	—	1ac : 日数不定	週5日	畜糞の運搬 (年に1回)
タイプ⑫	—	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タイプ⑬	3日	<sup>3</sup> / <sub>4</sub> ac <sup>(注3)</sup> ×3日	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac × 7日 (4週で)	○	2 bushel	C*, M*, S*	—	<sup>3</sup> / <sub>4</sub> ac <sup>(注3)</sup>	<sup>3</sup> / <sub>4</sub> ac <sup>(注3)</sup>	1ac×7日 (4週で)	週2日	—
タイプ⑭	3日	1 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac × 毎週3日	—	2 bushel	M*, S*	○	—	—	—	週2日	—
タイプ⑮	3日	<sup>3</sup> / <sub>4</sub> ac	—	—	2 bushel	—	○	—	—	—	—	—
タイプ⑯	3日	1 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac × 毎週2日	○	2 bushel	—	○	—	—	—	—	トイレ掃除
タイプ⑰	3日	<sup>3</sup> / <sub>4</sub> ac <sup>(注3)</sup>	<sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac × 毎週1日	—	2 bushel	—	○	—	—	—	週1日	—
タイプ⑱	3日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タイプ⑲	3日	1 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> ac	—	—	—	—	—	—	—	—	年に100賦役	—

備考)「穀物の運搬」の M\*,S\*,C\* は、それぞれ Melneflete,Stratehende,Crekeshch' の略である。  
注) (1) 小麦やオート麦の場合は1日に<sup>1</sup>/<sub>2</sub>ac. 大麦の場合は1日に<sup>1</sup>/<sub>4</sub>ac. という意味である。  
(2) 2ac. の小麦畑と2ac. のオート麦畑で犁耕と耙耕を行うという意味である。  
(3) 史料では3 perticatas と記されているが、タイプ⑪と⑬のみが負っている犁耕の総量が5<sup>1</sup>/<sub>2</sub>ac. であることから逆算して1 perticata = <sup>1</sup>/<sub>4</sub>ac. と理解し、<sup>3</sup>/<sub>4</sub>ac. とした。

合の賦役である。したがって、刈り取りが終わるまで続けられる不定量なものであり、週賦役負担者がほとんどを背負わされていた。

【脱穀】そのものについては改めて説明する必要はないが、作業量に関して若干の説明を加えたい。表ではすべて bushel で表示したが、史料では mensura と bussellus の2つが使われており、両者の関係を1mensura=2busselli と理解した。というのも、(C3) Robertus Shonke の脱穀作業の個所で、《それ(=メンスラ)に基づいて他の慣習保有農が脱穀作業を行う同じメンスラで2ブッシェルの小麦かライ麦を脱穀しなければならない。脱穀の評価額は<sup>1</sup>/<sub>2</sub>d. である。》Et debet .ij. bussellos frumenti vel siliginis per eandem Mensuram per quam et alii Customarii operantur et valet eadem triturationis .ob. とあり、また、意訳文を記した C4に、《1年に2メンスラの小麦またはライ麦を脱穀しなければならない。1メンスラの量は上に述べた通りであり、脱穀の評価額も上に述べた通りである》Et trittrabit per annum .ij. Mensura frumenti vel siliginis et continet mensura vt supra precium triturationis vt supra. とあるため、1メンスラ＝2ブッシェルと理解したのである。

【穀物の運搬】いずれも場所を特定できないものの、近隣の集落であると思われる Crekeshech' や Melneflete, Stratehende への穀物の運搬である。1賦役当たりの小麦<sup>1</sup>/<sub>2</sub>q. の運搬回数は、Crekeshch' が1回、Stratehende が3回、Melneflete へは5回である。このことから判断すれば、Crekeshch' が最も遠く、Melneflete が最も近い集落になる。

なお、「教会の身廊まで」と解することもできる ad Navem であるが、Crekeshch' には付かず、Melneflete と Stratehende のみに付随していることもあり、ここでは「舟で」と訳した。

【その他】袋詰めは、《召喚された時には、舟で運搬するための穀物を満たすための袋を保持しなければならない》Et debet tenere saccos ad implendum ad cariagium ad Nauem quociens citetur. の内容を表したものである。荘役の職務や領主の粉ひき小屋での粉ひき同様、週賦役を負っていない保有農のみが負担した作業であった。トイレの掃除は、簡易便所の清掃 mundabit bene cameram privatam のことである。

ところで、Extentaの「牧草地」項目によれば、このマナーには5ac.の牧草地が存在したのであるが<sup>34)</sup>、賦役の中に干し草作りの記述がまったく見られない。干し草作りには牧草の刈り取り、拡散、収集、積み上げなどの作業が必要であり、カンタベリ修道院が所有したサフォークの2マナー、Monks EleighやHadleighでは、遂行された週賦役の5%あるいはそれ以上が費やされていた<sup>35)</sup>。

ところが、賦役の遂行内容も記録した「報告書」を調べても週賦役負担者が干し草作りを行った形跡はみられず、このマナーでは先に述べたファムルスが干し草作りをも担っていたと考えざるを得ない。この点が、Middletonの特徴の1つである。

さて、この表からは、これ以外にも様々なことが読み取れるが、紙幅の制限もあり、ここでは全体を通しての印象を述べるに止めたい。

(1)すでに述べたように、保有資産が多様であるために賦役の内容も多様であり、全体で23賦役地しかないにもかかわらず、賦役のタイプは19通りに分類される。

(2)多くのタイプに分けられるとはいえ、わずかな差異しか見られないものが多く、この意味で、週賦役と犁耕・耙耕を伴うタイプ、週賦役は負っているものの犁耕・耙耕を伴わないタイプ、週賦役も犁耕・耙耕も負っていないタイプの3つに大別することもできよう。

(3)週賦役と犁耕・耙耕を伴うタイプ⑪は、いずれも30ac.の耕地を保有するC11とC13である。同じ面積の賦役地でありながら、週賦役の日数や犁耕・耙耕の面積が異なる理由は不明であるが、30ac.の賦役地が最も重い負担を負っていることから判断すれば、30ac.が本来の標準賦役地面積であったと考えられよう。

(4)とすれば、多様な賦役地面積と多様な賦役内容は、本来の標準賦役地の分割・細分化に伴って生じたものとも考えることも可能である。その場合、すでに述べたことであるが、新旧の保有者名が異なるケースが多いことから判断して、DB時からの200余年の間に村人間で売買・譲渡が繰り返され、開墾による耕地の拡大もあって、このような多様な土地保有と多様な賦役形態が生じたものと思われる。

隷農保有地は無論、自由保有地においても見られた出廷の義務を欠く耕地も、そうした状況の中で生まれたものであると考えられよう。

## V おわりに

以上が、Middletonマナーにおける土地保有と義務負担の内容およびその特徴、そうした特徴をもたらした背景についての説明であり、本稿の目的の一つが達成されたことになる。それゆえここでは、目的の二つ目、すなわち、「評価簿」と「報告書」を組み合わせることで明らかになる事実、あるいはメリットについて記す。

(1)「評価簿」では、C11とC13(タイプ⑪)、C14-1とC15(タイプ⑬)の保有農が犁耕・耙耕賦役を遂行する義務を負っていた。しかし、彼らが実際に犁耕賦役や耙耕賦役を遂行したのは1290年代の初めまで<sup>36)</sup>、それらは「評価簿」が作成された1309年以前から貨幣で代納されていたことになる。

その後も彼らが遂行されることはなかったから、畜糞の運搬も含めて、彼らのみが課せられていた賦役は有名無実となり、賦役負担が軽かった他の保有農同様、負担の重心が貨幣地代へ移りつつあったことを明らかにしてくれる。

(2)「評価簿」はタイプ⑪と⑬、⑭、⑰、⑲のみが週賦役を負わされていた実態を明らかにしてくれるが、どのような作業をどの程度遂行したかについては何も伝えてくれない。「報告書」は、誰がどれだけの賦役を遂行していたかまでは明らかにしてくれないものの、全体としての彼らの遂行数と作業内容については明らかにしてくれる。例えば、1295-96年に彼らが果たすべき週賦役(「報告書」での用語

Mar. 2012

Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Customarii)

は minuta opera) 1065 (日) のうち、実際に遂行されたのは884 (83%) で、残りの181は貨幣で代納されたこと、884賦役の70%弱が脱穀に当てられていたことを明らかにしてくれる<sup>37)</sup>。

(3)先述したように、「評価簿」からは5ac. の牧草地の存在が確認できたが、「報告書」も含めて、干し草作りの賦役に関する記述は見られなかった。このため、ファムルスがその作業を担っていたと結論づけたのであるが、これも両者を突き合わせることで得られた結論である。

(4)穀物生産が縮小された1340年代以降も4名の犁耕夫が維持されたことはすでに述べたが、その理由については結論を保留してきた。「評価簿」と「報告書」がこれに対する推論の素材を提供してくれる。すなわち、前者からはわずか4賦役地しか犁耕・耙耕賦役を負っていないことが明らかになり、後者からは領主が犁耕・耙耕賦役の貨幣代納金額をはるかに上回る犁耕代金を保有農から受け取っていたことが明らかになる<sup>38)</sup>。

これらから導き出さうる結論は、領主の犁と犁耕夫が農民の畑を犁耕することで得られる収入があったために、直営耕地での穀物生産が縮小した後も4名の犁耕夫を維持したと考えられること、また、領主の犁と犁耕夫に依存しなければならぬほどに保有農が資力を欠いていたと考えられること、さらに、そのような状況であったがために1290年代初めに犁耕・耙耕賦役が金納化されたと考えられること、この3点である。

以上が、「評価簿」と「報告書」を組み合わせることで明らかになった事実、あるいはメリットである。

以上で本稿の目的のおおよそは達成されたと考えているが、Middleton の事例と他の4マナーの事例との比較を通して、上に述べた結論をより明確化することが今後の課題である。

### 【付 記】

\* 本稿は、2009年度阪南大学国外研修制度を利用して行ったカンタベリ古文書館での史料収集・読解の成果である。

### 注

- 1) 拙稿①「Monks Eleigh (Suff.) における14世紀の賦役労働と雇用労働」(『阪南論集』社会科学編、第37巻第3号、2002年) および②「Hadleigh マナー (Suff.) における14世紀の穀物生産」(『阪南論集』社会科学編、第37巻第3号、2008年)。
- 2) 筆者が目を通した文献は以下のとおりであるが、本稿の目的が Middleton マナーにおける土地保有と賦役の実態を明らかにするものであるため、ここではこれらに触れず、他日を期したい。①N.E.Stacy (ed.) ,*Charters and Customs of Shaftesbury Abbey 1089-1216* (Oxford,2006) や②S.R.Scargill-Bird,*Customs of Battle Abbey in the Reigns of Edward I and Edward II 1283-1312* (Camden New Series, vol.41,1887), ③Marjorie Chibnall (ed.) ,*Select Documents of the English Lands of the Abbey of Bec* (Camden 3<sup>rd</sup>. series,vol.73,1951), ④A.T.Bannister (ed) 'A Transcript of "The Red Book" of the Bishopric of Hereford (c.1200)' in *The Camden Miscellany Vol XV* (Camden 3<sup>rd</sup>. series,vol.41,1929), ⑤國方敬司『中世イングランドにおける領主支配と農民』(刀水書房、1993年) ⑥森本 轟「13世紀後期におけるノリッチ司教座聖堂付属修道院領の経済構造について」(『名古屋学院大学論集』社会科学篇、第17巻第3号、1981年) ⑦同「13世紀後期におけるノリッチ司教座聖堂付属修道院領の農民的土地保有について」(『名古屋学院大学論集』人文・自然科学篇、第17巻第2号、1981年) ⑧同「中世ノフォークの1村落における農民的土地保有の諸類型について」(『名古屋学院大学論集』社会科学篇、第18巻第1号、1981年) ⑨同「13世紀後期におけるノリッチ司教座聖堂付属修道院領の村落構造について」(『名古屋学院大学論集』人文・自然科学篇、第18巻第1号、1981年) ⑩同「中世ノフォークにおける農民的土地保有について——Eton の場合」

(『名古屋学院大学論集』社会科学篇, 第18巻第2号, 1981年) ⑩同「中世ノフォークにおける農民の共同保有をめぐって——Newton を中心に——」(『名古屋学院大学論集』社会科学篇, 第19巻第1号, 1982年)。

- 3) Extenta Manerii de Bokkyng' in Register K, folio Lx-d.-Lxiiij-f.
- 4) Extenta Manerii de Borlee in Register K, folio Lxv-f.-Lxvj-f.
- 5) Extenta Manerii de Lalling' in Register K, folio Lxxiiij-f.-Lxxv-d.
- 6) Extenta Manerii de Hadlegh' in Register K, folio Lxxxj-f.-Lxxxv-d.
- 7) Extenta Manerii de Middeltone facta ibidem die Mercurii proxima ante festum sancti Barnabe Apostoli Anno domini M.CCC.Nouo Regni Regis Edwardi filii Regis Edwardi secundo [Extenta Manerii de Middeltone].
- 8) 「マナーの寄進」, 「ドームズデイ調査」の写しに続いて記載された項目は以下のとおりである。すなわち, 「固定額地代」 Redditus Assise de Middeltone と「現物地代」 Galline et Ova, 「慣習地代」 Consuetudines, 「司教への貢納」 Exhennium, 「賦役」 Opera, 「(賦役の) 控除」 Allocatio, 「以前の調査」 Extentus Vetus であり, この後に「評価簿」 Extenta が登場する。
- 9) 文字の省略方法の違いとは, 例えば, terra を terr' とするか t' r' とするか, あるいは, sectam Curie を s' Cur' にするか sect' Cur' にするかの違いのことである。
- 10) John Morris (ed.), *Domesday Book Essex* (DB series no.32,1983), text 2,7.
- 11) 上述のテキストによれば, Essex にはラテン語で Mildeltuna, 英語で Middleton と表記されたマナーが存在するが, この Middleton はカウンティ最北部の Hinckford Hundred にあった Gilbert 伯の息子 Richard や牧師 Gilbert, Robert Malet が所有していたマナーであり, この論文で対象とする Rochford Hundred の Middleton とは全く異なるものである。前掲書 text 23,20. 82,1. 90,84。
- 12) 1800年代に作成された数枚のエセックス - カウンティの古地図, 例えば, 'Southend History' に掲載された1824年作成の地図 <[http://www.thesoutheastco.uk/images2/map%201824\\_closeup.jpg](http://www.thesoutheastco.uk/images2/map%201824_closeup.jpg)> (2011年10月19日) で Milton Hall の名前が確認できる。
- 13) Register B, folio Lj-f. なお, 前掲 *Domesday Book Essex* では bordmanni の数は13名になっている。John Morris, op. cit., text 2,7.。
- 14) 4ハイドの Bocking では領主と農民の犁が2台と9台, 農民が62名(奴隷2名を除く)存在し, 14ハイドの Lalling では3台と16½台, 41名(奴隷2名を除く)であった。
- 15) このことは, 例えば, 1372-73年の Compotus の [Solidata] 項目の記述, In vadio seruitentis nichil hic quia habet allocationem in Rotulo de Suthecherch', から推測できる。
- 16) DB に登場する villani, bordmanni と Extenta に現れる libere tenentes, customarii の関係が定かではないため, ここでは単に, 11世紀後半と14世紀初頭の土地保有農民の総数を記すに止めたい。
- 17) この時期が著しい人口の増加期であったことは, 数多くの研究者によって主張されているが, 中世史の泰斗とも言うべき Postan の著作・論文の中から一冊を挙げる。M.M.Postan, *The Medieval Economy and Society: An Economic History of Britain in the Middle Ages* (1972), pp.27-34 ≪保坂栄一・佐藤伊久男訳『中世の経済と社会』(未来社, 1983年), 41-56ページ≫。  
CCA にはこの時期の裁判所記録がほとんど残されておらず, 残念ながら, Middleton を含む諸マナーの人口増加を示すことは不可能である。むしろ, ここに記した保有農の増加がその傍証になる。
- 18) [terre dominice] Summa acrarum .C.iiiij. acre et .iiij. rode., Appendix, p. 20.
- 19) 先に同じ修道院の Bocking, Lalling の2マナーと比べて Middleton は小規模なマナーであったと記したが, 比較できる年度の播種面積が明示されている Peterborough Abbey の23マナーと比較すると, 例えば, 1307-08年の Middleton の214½ac. は, 23マナーのほぼ中位にあり, 決して小規模でなかったことが分かる。Edmund King, *Peterborough Abbey 1086-1310: A Study in the Land Market* (1973), Table 9, p.151. ついでに記せば, ノーフ



Mar. 2012 Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Customarii)

- オークの Forngett マナーにおける同年の播種面積は161ac.であり, Middleton の方が50ac. ほど多い。  
F.G.Davenport, *The Economic Development of a Norfolk Manor 1086-1565* (1967), p.27。
- 20) 1372-73~1384-85年の「マナーの女中」 ancila manerii が「マナー館の女中」の別表現であるとするれば, 女奉公人はほぼ全期間雇用されていたことになる。
- 21) 1283-84~1298-99年の期間に存在した豚番 porcarius を兼ねた馬鋤引き herciator qui est porcarius を, その後 1300-01年から登場する家畜番の前身とみなした。
- 22) 2 名に減少した1372-73年以降は, 小麦と大麦の播種期に 3 週ずつ計 6 週間働く犁耕夫が 2 名雇用され, 常雇いの犁耕夫をサポートしている。
- 23) これらのうち, 荷馬車引きのみは, 1294-95~1300-01年, 1304-05年の 5 年に限り, 短期間 (明示されたものでは15週) 雇用された者が 1 名存在した。
- 24) 本稿15ページ。
- 25) Apendix の Extenta は, 便利さを考えて挿入した参照番号と注およびマーク (\*), (sic) を除けば, Register K 所収の Extenta そのものに省略部分を補って掲載したものである。必要に応じて参照されたい。
- 26) Idem Willelmus tenet de Domino dimidiam acram terre quam adquisivit de Warino filio Ranulphi.
- 27) このマナーでは領主が湿地で採取されるニガイ musculum から採取料 redditus musculorum を取っており, 保有農がニガイ漁を行っていたことは確かである。Appendix, p.21 [Redditus Musculorum]。他所領におけるエール醸造の副業の例が國方の前掲書に詳しく載っている。189~210ページ。
- 28) Extenta の [fines et perquisita Curie et visus] 項目に記された 'de iij septimanis in iij septimanas' という意味不明の表現については, Bennet の解釈に従って '3 週ごと' と解した。H.S.Bennett, *Life on the English Manor : A Study of Peasant Condotions 1150-1400* (1937 f.), p.195。ただ, Middleton で 3 週ごとに開廷されていたかは疑問である。というのは, 「報告書」は, 賦役日が開廷日と重なる場合には賦役を免除すると記しているが, それを理由として免除された賦役日は最大でも 3 日だからである。
- ちなみに, 1376-77年の Forngett マナー (Norfolk) では年に 5 回開催されている。Frances G. Davenport, *The Economic Development of a Norfolk Manor 1086-1565*, (new impression, 1967) Appendix IX, pp.lij, lvij。また, Newland マナーでは Edward I と II の時代に 5, 7, 8 回開催された記録があるものの, Edward III の治世に減少に転じている。Ada E. Levett, *Studies in Manorial History* (reprint, 1962), p.134。Levett によれば, ballivus などの役職者の出席のもとで 3 週間おきに開廷することは無理だったから, というのが減少に転じた理由の説明である。Levett, op.cit., pp.134-135。
- 29) Levett, op.cit., p.135。
- 30) 出廷義務が属人的ではなく属物的性格を有するものであったことを示す他の好例が, Pollock and Maitland, *The History of English Law Vol. 1* (reprint of 2<sup>nd</sup> edition, 1911 f.), p.541, note 1にある。
- 31) 保有移転および土地市場については, 例えば, J.Ambrose Raftis, *Tenure and Mobility : Studies in the Social History of the Medieval English Village* (1981) pp.63-91, John Mullan and Richard Britnell, *Land and Family : Trends and Local Variations in the Peasant Land Market on the Winchester Bishopric Estates, 1263-1415* (2010), pp.103-131, 國方前掲書152~177ページ。
- 32) ちなみに, Ramsey 修道院領では, 同じマナーの自由農のみならず村外者が隷農地を保有する例が見られる。Raftis, op.cit., p.69。
- 33) 貨幣地代額に現物地代 (評価額が 1 羽 1½d. の鶏や 20 個で 1d. の卵) の支払いを加味しても, C1 と C2-1 はそれぞれ 7⅓d. と 1⅓d. であり, C5 と C10 はそれぞれ 2⅓d. と 4⅓d. であって, 貨幣地代額のみを比較した結果と大きく変わらない。
- 34) [Pratum falcabile] Sunt ibidem de prato falcabili sub Manerio ---.v. acre et ---, Appendix p. 20。

- 35) 前景拙稿①52ページ, ②80ページ。
- 36) 例えば, 1293-94年の「報告書」の金銭勘定の収入欄には, [Consuetudines] Et de .iij.s. ij.d. ob. receptis de arura .v. acrarum dimidie de gabulo relaxsata customariis ad seisonam yemalem pro acra .vij.d. Et de .iij.s. ij.d. ob. receptis de arura totidem acrarum de gabulo relaxsata eisdem ad seisonam auene. とあり, 小麦およびオート麦の播種時の犁耕賦役がすべて売却されたことが記されている。耙耕賦役と畜糞の運搬賦役も同じように売却されており, しかもこれらすべては考察対象期間の最後まで実際に徴収されることはなかった。
- 37) 1295-96年に遂行された週賦役の884(日)の内容であるが, 脱穀に608(68.8%), 除草に120(13.6%), 収穫に140(15.8%), その他であった。考察期間全体でみても, 最も多かったのは脱穀作業で, 穀物生産が衰退し始めた1340年代以降も, 遂行された賦役の50%以上を占めていた。次に多かったのが除草作業であり, 収穫作業は3番目である。収穫が3番目であったのは, ほとんどすべての慣習保有農が負担した表3の「収穫①」「収穫②」で作物の大部分が刈り取られていたことを表している。
- 38) 犁耕代金とは, 「報告書」の金銭勘定の収入欄にある [Arura vendita] のことである。恐らくは犁耕夫が領主の犁を用いて保有農の畑を犁耕することで得られた収入で, 36) で述べた1293-94年の犁耕・耙耕賦役の売却代金が9s. 11d. であったのに対し, 犁耕代金は£3 12s. 6d. であった。前者が一貫して変わらなかったのに対し, 後者は毎年3ポンド以上の収入をもたらしている。

Mar. 2012 Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Custumarii)

## Appendix

### Extenta Manerii de Middeltone in Register K

< Lxvij-f. ~Lxxj-f. / 87-f.~91-f. >

< Lxvij -f. / 87-f. >

#### //Extenta Manerii de Middeltone

Extenta Manerii de Middeltone *facta ibidem die Mercurii proxima* ante *festum sancti Barnabe Apostoli* Anno domini M.CCC. Nouo Regni Regis. Edwardi. filii Regis .Edwardi. secundo. coram Iohanne Le Doo tunc temporis Seneschallo *per manus Willelmi de Folesham* clerici. et *per Sacramentum* Johannis Le Wysede Pritelwell'. Iordani Skote. Iohannis Huwes. Roberti Shanke. Iohannis Waryn. Iohannis Le Clerk'. Iohannis Le Hirde. Phillipi. Totebouch'. Ade Orgor. Iohannis Fabri. Reginaldi ate Felde. Willelmi de tenet *seruientis qui omnes et singuli* jurati dicunt quod Prior ecclesie Christi Cant'et Conuentus eiusdem Loci tenent Manerium de Middeltone *in liberam puram et perpetuam* Elemosinam vt intelligunt.

#### Mesuagium.\* Curtilagium.\* Gardinum\*

//Est ibidem vnum Mesuagium bene et racionabiliter edificatum (sic) et sufficit *pro* exitibus eiusdem Manerii et continet in se *per estimacionem* tres acras terre et valet herbagium inde *per annum* .viij. d. Et Curtilagium inde valet *per annum* .xij. d. aliquando plus aliquando minus *secundum* quod appruatur. Et gardinum inde valet *per annum* vt in pomis piris vuis vinearum cum acciderint .xij. s.

Summa .xiiij. s. viij. d.

#### Columbarium.\*

Est ibidem vnum columbarium de nouo reparatum et valet *per annum* si instauretur .iiij. s. aliquando plus.

Summa .iiij. s.

#### Molendinum.\*

//Est ibidem vnum Molendinum ventriticum et dimittitur *per annum* pro .xij. quarteriis Bladi Mixtilonis et valent *per annum* .xxxvj. s. *precium quarterii* .iiij. s. <sup>(1)</sup> aliquando plus aliquando minus.

Summa .xxxvj. s.

#### Boscus.\*

//Est ibidem quidam Boscus vocatus Middleton'wode et continet in se .xv. acras et valet subboscus inde *per annum* .vj. s. Et Herbagium inde *per annum* cum pannagio non extenditur ; quia non crescit nisi *per* Loca pauca et non esset ad commodum domini si depascitur propter Bosci inuentutem.

Summa .vj. s.

## [凡 例]

- ①イタリックスは史料では省略されていた文字を補ったものであり、下線を引いた文字は文字列の上に記されていた文字を表す。例えば、史料における a° dno はここでは *anno domino* と表記されている。
- ② Mesuagium.\* のように、★マークの付いたゴシック文字はすべて欄外の文字であることを表す。
- ③テキスト本文中の< >付きの部分は史料のページを表し、[ ]および( )を付した部分は筆者が付け加えたものである。

**terre dominice.\***

Sunt ibidem de *terra* arabili in *dominico* in quodam Campo vocato Pirifeld .<sup>xx</sup>.iiij. et .xvij. acre et valent per annum .xlviij. s. vj. d. *precium* acre .vj. d. Et in quodam alio Campo vocato Heuedfeld .xxij. acre et valent per annum .xxij. s. *precium* acre .xij. d. Et in quodam Campo vocato Kyngestonesfeld .Lviij. acre et *dimidia* et valent per annum .xxxviij. s. iiij. d. *precium* acre .viiij. d. Et in quodam Campo vocato Haluehid' .xliij. acre et tres rodas (sic) terre et valent per annum .xliij. s. ix. d. *precium* acre .xij. d. Et in quodam Loco vocato Abrammyslond .xiiij. acre terre et valent per annum .vj. s. vj. d. *precium* acre .vj. d. Et in quodam Loco vocato Westermille .v. acre et valent per annum .ij. s. vj. d. *precium* [acre] .vj. d. Et in quodam Campo vocato Northfeld .v. et xvj. acre et valent per annum .iiij. li. xvj. s. viij. d. *precium* acre .x. d. Et in quodam Campo vocato Goselonde .xx. acre et valent per annum .x. s. *precium* acre .vj. d. Et in quodam Loco vocato Sutetmede .v. acre et *dimidia* *precium* .ij. s. ix. d. *precium* acre .vj. d.

*Summa* *acrarum* .CCC. <sup>xx</sup>.iiij. acre .iiij. rode.

*Summa* *valorum* .xiiij. li. xij. s.

Et sciendum quod *pericata* terre in isto Manerio debet esse de *Longitudine* .xvj. pedes et *dimidius* et quelibet acra terre *congrue* potest seminari de .ij. *bussellis* *dimidio* frumenti. Et de .iiij. *bussellis* *Siliginis*. Et de .iiij. *bussellis* *pisarum*. Et de .iiij. *bussellis* *vescarum* Et [de] .iiij. *bussellis* *Auene*. De .iiij. *bussellis* *ordei*. Et de .iiij. *bussellis* *drageti*. Et quelibet caruca debet iungi de .iiij. *affris* et <sup>or</sup>.iiij. *bobus*. Et Caruca potest *communiter* arrare per diem vnam acram terre.

< Lxvij-d. / 87-d. >

**Pratum falcabile.\***

Sunt ibidem de *prato* falcabili sub Manerio ex parte aquilonis .v. acre et valent per annum .v. s. *precium* acre .xij. d. et non plus ; quia non crescit nisi per Loca pauca.

*Summa* .v. s.

**Pastura separabilis.\***

Est (sic) ibidem de *pastura* separabilis vocata Bradefeld .xj. acre et valent per annum .vij. s. iiij. d. *precium* acre .viiij. d. et magis necessaria est vaccis Manerii et eisdem assignatur. Est etiam ibidem tanta *pastura* quod cum esiamiento camporum et friscorum domini tempore aperto de terris per annum non seminatis quod dominus potest habere in eadem *pastura* <sup>xx</sup>.vj. bidentes et valet *pastura* cuiuslibet capitis per annum .j. d. et non plus propter *resumpcionem* cibi <sup>(2)</sup> Bercatoris et quia pars illius pasture alias extendit in terra arrabili vt supra et preter hoc eadem *pastura* potest *rationabiliter* sustinere a principio Maii vsque ad festum sancti Michaelis .viiij. stottos .ij. equos *carectarios* et viij boues et xx. porcos per totum annum et non extenditur quia alias *appreciatur* in terra arrabili vt supra.

*Summa* .xvij. s. iiij. d.

**fines et perquisita Curie et visus.\***

Est ibidem quedam Curia de tenentibus et Custumariis domini de .iiij. septimanis in .iiij. septimanas et valent fines et perquisita Curie eiusdem cum heriettis et Releuiis et cum visu franciplegii tento per Ballivos domini ita quod nullus Ballivus domini Regis se in aliquo intromittat nec ibidem ea occasione veniat.

*Summa* .xx. s.

Mar. 2012 Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Custumarii)

### Redditus Musculorum.\*

Est ibidem quidam *Redditus Musculorum* in litore maris *et valet per annum* .xl. s. Et de quodam kidello in litore maris ad firmam *per annum* dimisso .xij. d.

*Summa* .xlj. s.

*Summa totalis* .xx. li. xiiij. s.

### Libere tenentes.\*

(L1-1) Nicholaus de Haueryngge *et* Margaria vxor eius tenent de *Domino* de Hereditate ipsius Margarie quoddam *tenementum* in Middleton' *Reddendo* inde *per annum* ad festum sancti Michaelis .vj. s. Et debet sectam Curie quod quidam tenens Henricus Grapinel tenere consuevit (L1-2) Idem Nicholaus *et* Margaria tenent de *Domino* in eadem villa quoddam *tenementum* quod Henricus de Plumbergh' aliquando tenuit. *Reddendo* inde *per annum* ad festum sancti Michaelis .xiiij. s. .iiij. d. ob. Et debet sectam Curie. (L1-3) Idem Nicholaus *et* Margaria tenent de *Domino* in Middleton' .xxx. acras terre *et* quandam peciam Marisci *Reddendo* inde *per annum* ad festum sancti Michaelis .iiij. s. x. d. quod quidam tenens Iohannes Le Carpent' tenuit *et* debet sectam Curie.

(L2) Laurentius Le porter tenet de *Domino* in Middleton' .lx. acras terre *Reddendo* inde ad festum sancti Michaelis .x. s. *et* debet sectam Curie.

(L3-1) Willelmus Potin tenet de *Domino* .v. acras terre *Reddendo* inde ad festum sancti Michaelis .iiij. s. *et* ad Natale domini .j. gallinam precium .j. d. o.

(L3-2) Idem Willelmus tenet de *Domino* dimidiam acram terre quam adquisivit de Warino filio Ranulphi. *Reddendo* inde ad Pascha .iiij. d. *et* sectam Curie.

(L4) Iohannes Huwes tenet de *Domino* .iiij. acras terre *Reddendo* ad festum sancti Michaelis .xij. d. Et ad Pascha .vj. d. Et faciet sectam Curie quod quidam tenens Hugo filius Gilberti tenuit.

(L5) Iohannes Goldston tenet de *Domino* .vij. acras terre *Reddendo* ad festum sancti Michaelis .iiij. s. viij. d. Et faciet sectam Curie.

(L6) Willelmus Haddock' tenet de *Domino* .iiij. acras terre *Reddendo* inde ad festum sancti Michaelis .ij. s. vij. d. Et faciet sectam Curie Et dicta terra vocatur Heyroneslond.

(L7) Iohannes Rolfe tenet de *Domino* .vj. acras terre *Reddendo* inde ad festum sancti Michaelis .iiij. s. xj. d. Et debet sectam Curie quod quidam tenens Emma de Bosco tenere consuevit.

(L8) Bartholomeus de Mockyng' tenet de *Domino* .j. acram terre de eodem tenemento *Reddendo per annum* ad festum sancti Michaelis .viij. d. *et* ad Natale domini .j. gallinam precium .j. d. o.

(L9) Turtle atte Cruche tenet de *Domino* .j. Mesuagium *et* .j. peciam terre quam Iohannes Silock' aliquando tenuit. *Reddendo* ad festum sancti Michaelis *et* ad Pascha .vij. d. *per equales et cetera* de tenemento Samuel' ate feld'.

//*Summa* *Redditus libere tenentium* .l. s. v. d. ob. Et .ij. Gallinas. (sic)

< Lxviij-f. /88-f. >

### Custumarii

(C1) Iordanus le Skynnere tenet de *Domino* in Vilenagio .iiij. acras terre quas Willelmus Sprot tenuit ; *Reddendo* inde *per annum* ad festum sancti Michaelis .xij. d. Et ad Pascha .viij. d. Et .ij. capones ad idem tempus *et* Metet in Autumpno *per* .j. diem *et* dimidium *et* *per* diem integrum commedet bis ad Mensam

*domini et habebit hora nona .j. panem fabes ad potagium Lac et caseum Et ad cenam dimidium panem et caseum. Et debet panis esse talis grossitudines de frumento et siligine vel de siligine et ordeo ad placitum domini unde de quarterio possunt fieri .Lij. panes. Et per dimidium diem commedet semel ad Mensam domini et habebit hora nona vt supra. Et valet dies integrus ad vendendum .j. d. q. Et in crastino diei integre (sic) quam metebat ; metet vnam virgatam frumenti vel auene sine cibo domini. Et in crastino dimidii diei quam metebat ; metet dimidiam virgatam terre frumenti vel auene sine cibo et Ligabit totum Bladum predictum et in omnibus preparabit vsque ad cariagium. Et valet messio virgate .ob. q. Et debet sectam Curie.*

(C2-1) Iohannes Hugnes tenet de Domino in eadem villa .ij. acras terre et dimidiam quas Petrus Hardewyne aliquando tenuit Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .iiij. d. Et metet in Autumpno per .j. diem et dimidium et habebit cibum vt supra. precium operis vt supra. Et debet omnia alia seruicia et habebit in omnibus et singulis sicut Iordanus predictus. Et debet sectam Curie. (C2-2) Idem Iohannes Hugnes tenet de Domino .xl. acras terre quas Willelmus filius Hugonis tenuit Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .v. s. viij. d. Et ad Pascha .iiij. s. iiij. d. Et debet ad Natale domini .iiij. Gallinas precium Galline .j. d. ob. Et ad Pascha .xl. oua. precium .ij. d. Et debet inuenire ad tres Bedrepes in autumpno ad Metendum ad quodlibet bedrepe .ij. homines et habebunt cibum suum vt supra quolibet die hora nona et ad cenam. Et in crastino predictorum trium dierum ; metet dimidiam acram frumenti vel auene vt supra sine cibo. Et triturbabit tres mensuras bladi eidem modo quo Iohannes filius Ricardi Le Wyse Et cariabit ad Nauem sicut predictus Iohannes. Et faciet sectam Curie. Et Molabit ad Molendum domini. Et erit prepositus in Manerio.

(C2-3) Idem Iohannes tenet de Domino quandam peciam terre quam emit de Richardo Mercatore Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .vj. d. et idem Richardus aliquando emit dictam terram de Willelmo filio Hugonis. (C2-4) Et idem Iohannes debet pro quadam acra terre adquisita de eodem Richardo .ob.

(C2-5) Idem Iohannes tenet de Domino vnam peciam terre quam Iohannes de Dychenyngg' et Emma vxor eius aliquando tenuerunt Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .j. denarium.

(C2-6) Idem Iohannes tenet de Domino vnam acram terre iacentem ex parte australi domus Roberti Iurdon Reddendo inde ad festum sancti Michaelis per annum et ad Pascha .iiij. d. per equales porciones.

(C3) Robertus Shonke tenet de Domino .v. acras terre quas Robertus Brun tenuit Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .x. d. Et ad Natale domini .j. gallinam. precium vt supra. Et ad Pascha .v. oua. Et debet .iiij. dies ad metendum in Autumpno et habebit cibum suum vt supra. Et debet metere in crastino sine cibo vt prius precium operis vt prius. Et debet triturare .ij. bussellos frumenti vel siliginis per eandem Mensuram per quam et alii Customarii operantur et valet eadem triturbacio .ob. Et debet auxiliare ad tondendas bidentes domini. Et per quot dies auxiliatur ad bidentes tondendas habebit per tot dies cibum suum videlicet quolibet die .j. panem et caseum precium panis .ob. Et debet sectam Curie.

(C4) Nicholaus de Hauering' et Margaria vxor eius Robertus dil temese et Matilda vxor eius tenent .xv. acras terre quas Walterus <sup>(3)</sup> Panyard aliquando tenuit. Reddendo inde ad festum sancti Michaelis per annum .xxxij. d. Et ad Natale domini < Lxviij-d. / 88-d. > .ij. gallinas. precium vt supra. Et ad Pascha .xv. oua. Et debet metere in autumpno per .iiij. dies. Et quolibet die hora nona habebit vnum panem ad Mensam domini eiusdem grossitudinis. vt supra fabes ad potagium et Lac et caseum vt supra. Et quolibet die ad cenam habebit dimidium panem et caseum. Et in crastino cuiuslibet predictorum trium dierum quibus metebat ; metet dimidiam acram de frumento vel auena sine cibo domini et Ligabit et in omnibus preparabit vsque ad cariagium Et valet messio cuiuslibet dimidie acre .j. d. ob. Et triturbabit per annum .ij. Mensuras

Mar. 2012 Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Custumarii)

*frumenti vel siliginis et continet mensura vt supra precium trituratione* (sic) vt supra. Et ducet bladum vel aliquid aliud pro voluntate domini ad Nauem ad pondus dimidii quarterii frumenti vel vnus quarterii auene et hoc semel quando alii Custumarii cariant bis et debet fieri cariagium ab hostio granarii de Middelton' vsque ad Melneflete Et quando ea parte cariat ; tunc debet quinquies cariare onus dimidii quarterii frumenti vel vnus quarterii auene. et tunc valet cariagium .j. d. Et si fiat cariagium ad Nauem apud stratende tunc non cariaabit nisi ter onus supradictum. et valet cariagium .j. d. Et sciendum quod cariaabit pro voluntate domini quocienscumque citetur ad cariaandum et <sup>(4)</sup> hoc nisi semel quando alii Custumarii cariauerint bis. Et auxiliabunt ad bidentes tondendas sicut Robertus Shonke et Molabunt ad Molendinum domini. Et debent officium prepositi. Et faciunt sectam Curie.

(C5) Iohannes filius Ricardi Le Wise tenet de Domino .xx. acras terre quas Warinus Le Wise tenere consuevit Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .iiij. s. iiij. d. Et ad Natale domini .ij. gallinas precium vt supra. Et ad Pascha .xx. oua precium .j. d. Et metet per tres dies in autumpno eodem modo sicut et predicti Nicholaus et partenens sui. Et in crastino cuiuslibet predictorum trium dierum [metet] dimidiam acram frumenti eodem modo quo predictus Nicholaus. Et triturbabit sine cibo eodem modo quo predicti Nicholaus et partenens. Et cariaabit Bladum apud Melneflete vel apud Stratende quocienscumque citetur ad idem onus sicut et dicti Nicholaus et partenens sui. Set si fiat cariagium apud Melneflete ; tunc cariaabit quinquies onus dimidii quarterii frumenti vel vnus quarterii auene Et si apud Stratende ; tunc non cariaabit nisi ter onus supradictum. Et Molabit ad Molendinum domini. Et faciet sectam Curie.

(C6) Iohannes Le Wise et Alicia Hugnes tenent de Domino .vij. acras terre quas Henricus atte Cruche tenuit Reddendo inde per annum ad festum sancti Michaelis .xviij. d. Et .j. gallinam ad Natale domini. Et ad Pascha .vij. Oua Et metet per .iiij. dies in autumpno eodem modo sicut et alii Custumarii Et in crastino cuiuslibet dierum trium metet vnam virgatam frumenti vel auene sine cibo domini. Et triturbabit .j. mensuram frumenti vel siliginis sicut Robertus Shonke. Et Molabit ad Molendinum domini. Et faciet sectam Curie.

(C7) Iohannes Martyn tenet de Domino .viij. acras terre quas Willelmus filius Martini tenuit. Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .ij. s. Et ad Natale domini .j. gallinam precium vt supra. Et ad Pascha .viij. oua. Et metet per .iiij. dies in autumpno ad cibum domini vt Nicholaus de Hauering'. Et in crastino quolibet trium dierum ; metet vnam virgatam terre frumenti vel auene sine cibo domini. Et triturbabit sine cibo domini sicut Robertus Shonke. Et debet tenere saccos ad implendum ad cariaandum ad Nauem quociens citetur. Et si tenuerit saccos per totum diem ; tunc habebit cibum suum ter per diem ad mensuram <sup>(5)</sup> domini. Et auxiliabit ad bidentes tondendas sicut et alii Custumarii et faciet sectam Curie.

(C8) Coleman Potyn tenet de Domino .v. acras terre quas Beatrix de Campo tenuit Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .xviij. d. Et ad Natale domini .j. gallinam. Et ad Pascha .v. oua. Et metet in autumpno sicut Iohannes Martyn. Et triturbabit et tenebit saccos et auxiliabit ad oues tondendas eodem modo quo Iohannes Martyn. Et debet sectam Curie.

(C9-1) Iohannes Seeman tenet de Domino .v. acras terre que vocantur Semaneslond Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .ij. s. iiij. d. Et ad Natale domini .ij. gallinas precium vt supra. Et ad Pascha .v. oua. Et metet per .iiij. dies in autumpno ad cibum domini sicut Iohannes Hugnes. Et triturbabit sicut Iohannes Martyn et < Lxix-f. / 89-f. > Et (sic) auxiliabit ad oues tondendas eodem modo quo predictus Iohannes. Et faciet sectam Curie.

(C9-2) Idem Iohannes tenet quoddam Mesuagium quod Iordanus Scose tenuit. Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .viij. d.

(C10) Gilbertus filius Laurencii atte feld Matillda Mulet Iohannes Le Wise et Willelmus Tepe tenent de Domino .xij. acras terre. Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .iij. s. vj. d. Et ad Pascha .vj. d. Et ad Natale domini .j. gallinam. Et ad Pascha .x. oua. Et metent in autumpno sicut Iohannes Martyn. et eciam sicut Iohannes Seeman. Et triturbunt .j. Mensuram bladi sicut et alii Customarii. Et tenebunt saccos et auxiliabunt ad bidentes tondendas sicut Iohannes Martyn. Et facient sectam Curie.

(C11) Iohannes Le Clerk' et Iohannes Le Neweman tenent de Domino duo Mesuagia et .xxx. acras terre ; quas Iordanus de Middelton tenere consuevit. Reddendo inde per annum ad festum sancti Michaelis .x. d. et arrabunt .ij. acras terre domini inter festum sancti Michaelis et Natale domini et easdem sine cibo domini herciabunt. Et inter Natale domini et Pascha arrabunt duas acras terre et eas herciabunt et valet (sic) arrura et herciatura illarum .iij. acrarum .ij. s. Et allocabuntur eisdem pro arruris et herciaturis predictis ex consuetudine inter festum sancti Michaelis et Pascha quatuor dies. Et si caruca domini post Natale domini aliquam terram ad auenas arrauerit et non hercietur iidem Iohannes et Iohannes cum equo et hercia sua propria super dictam terram herciabunt Ita quod quolibet die herciabunt .j. acram et ita tamen quod hercia domini et hercie suorum quatuor parium super eandem terram secum hercient et sic quolibet die herciabunt vnam acram quousque Caruc' domini per herciaturam attinxerint (sic) Et per quot dies sic herciauerint ; tot dies eis allocabuntur de diebus quibus debent operari. Et metent in autumpno ad .iij. Bedrepis ad quolibet (sic) bedrepe per .ij. homines ad cibum domini quolibet die Hora nona duos panes supradicte Magnitudinis Et ad cenam .j. panem Et alium cibum Hora nona Et ad cenam sicut alii Customarii. Et preter hoc metere debent in autumpno quolibet (sic) die dum Dominus habuerit Bladum ad metendum dimidiam acram frumenti vel auene sine cibo domini nisi dies festiualis euenerit. Et si ordeum metere debeat ; tunc non metet nisi vnam virgatam et Hoc sine cibo. Et totum bladum quod sic metet preparabit in omnibus et promptum faciet vsque ad cariagium sine cibo domini. Et operabit qualibet septimana operabili a fine autumpni vsque ad autumpnum proximum sequens incipientem et faciet ex consuetudine .v. opera. ita scilicet. quod si trituret bladum ; triturbabit vnam mensuram frumenti vel siliginis sine cibo per quam mensuram alii Customarii triturant Et si fodere debeat vel aliquid aliud simile <sup>(6)</sup> facere ; operabit a mane vsque ad nonam Et sic operabit per totum tempus supradictum nisi dies festiuis inciderit ita tamen quod sibi allocabuntur .iij. opera pro arrura quatuor acrarum terre <sup>(7)</sup> arratarum inter festum sancti Michaelis et Pascha. Et tot opera ex consuetudine sibi debent allocari quot dies herciauerit ad auenam domini seminandam inter Natale et Pascha. Et preterea triturbabit tres mensuras sine cibo per quam mensuram alii customarii triturbabunt de frumento vel siligine. Et dabit ad Natale domini .iij. gallinas et .j. gallum precium vt supra. Et ad Pascha .xxx. oua. Et cariabit fimum domini sine cibo semel per annum set tunc allocabitur sibi pro singulis decem bigatis fimi vnus dies operabilis ex consuetudine per annum. Et auerabit apud Crekeshech' quociens et quando sumonitus fuerit et cariabit ad onus dimidii quarterii frumenti et Hoc sine cibo domini. Et allocabitur ei pro quolibet aueragio .j. dies operabilis. Et si cariat ad Nauem apud Strateshonde ; cariabit ter onus supradictum. et allocabitur pro .j. opere. si cariat apud Melleflete ; tunc cariabit quinquies onus supradictum et allocabitur in eo .j. opus. Et duo opera de consuetudine sibi allocabuntur ad festum sancti Michaelis pro .x. denariis redditus ad festum sancti Michaelis (sic). Et facient sectam Curie.

(C12) Idem Iohannes Le Clerk' tenet de Domino .vij. acras terre quas idem Iordanus de Middelton' tenere consuevit Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .xxij. d. Et debet metere in autumpno dimidiam acram frumenti vel dimidiam acram auene sine cibo domini.

(C13) Iordanus Skote et Philippus Aleyn tenent de Domino vnum Mesuagium et .xxx. acras terre quas



Mar. 2012

Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Custumarii)

pyrman *et* Brungor < Lxix-d. / 89-d. > tenere solebant. Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .x. d. Et ad Natale domini .iiij. gallinas Et ad Pascha .xxx. oua. Et metet in autumpno *et in omnibus faciet tot et tales consuetudines et seruicia* sicut predicti Iohannes Le Clerk' *et* Iohannes Neweman. Et sectam Curie Ita tamen quod vnus faciet medietatem consuetudinis per se et alius per se et separatim.

(C14-1) Idem Iordanus <sup>(8)</sup> Skote tenet per se .x. acras terre Reddendo inde per annum .iiij. d. q. <sup>a</sup> ad festum sancti Michaelis Et faciet omnia Alia seruicia et consuetudines quas Iohannes Skote faciet nisi quod Iordanus Skote operatur per dies Martis *et* per dies veneris Et Iohannes operatur per dies Lune *et* Mercurii. Et faciet sectam Curie.

(C14-2) Idem Iordanus tenet de Domino .ij. acras terre quas Iohannes Turtle aliquando tenuit Reddendo inde ad Pascha .iiij. d. Et iacet dicta terra inter terram quondam Iohannis Peres de Sutcherche ex parte occidentali *et* terram predicti Iohannis Turtle orientali.

(C14-3) Idem Iordanus tenet de domino .ij. acras terre de tenemento quondam Agnete relicte Warini Randolf' Reddendo ad festum [sancti] Michaelis *et* Pascha .ij. d. per equales porciones. (C14-4) Et pro .j. acra terre in Warynesdune empta de Stephano Potyn ad festum sancti Michaelis .j. d.

(C15) Iohannes Skote *et* Matilda Treppes tenent de Domino vnum Mesuagium *et* .x. acras terre Reddendo inde per annum ad festum sancti Michaelis .iiij. d. q. <sup>a</sup> Et ad Natale domini quolibet anno .j. gallinam *et* quolibet alio anno sequente .ij. gallinas. Et ad Pascha .x. oua. Et arrabit *et* herciabit inter festum sancti Michaelis *et* Natale domini tres perticas terre domini sine cibo. Et arrabit inter Natale *et* Pascha tres perticatas sine herciatura *et* sine cibo Et debet quolibet alio anno .j. vomerem precium .vj. d. Et si caruca domini arrauerit post Natale ad auenas *et* non herciauerit ; idem Iohannes cum hercia sua herciabit super eandem terram per tres septimanas quolibet die Lune *et* quolibet die veneris <sup>(9)</sup> cum hercia domini *et* herciis aliorum qui sic hercitare debent .j. acram. Et per quartam septimanam quolibet die Lune herciabit vnam acram quousque attinxerint per herciaturam caruce domini. Ita scilicet quod per quot dies Lune vel dies Mercurii herciauerit; tot dies sibi allocabuntur de operibus suis. Et metet in autumpno per tres dies integros sicut Iohannes Martyn ad cibum domini. Et metet sine cibo per .iiij. dies tres perticatas frumenti vel auene. Et preterea metet quolibet die Lune *et* Mercurii per tres septimanas in autumpno dimidiam acram. Et quolibet die Lune in quarta septimana metet dimidiam acram frumenti vel auene dum Dominus habuerit [bladum] ad metendum *et* hoc sine cibo Et totum Bladum quod sic metet promptum faciet ad cariagium. Et triturbabit vnam mensuram frumenti vel siliginis per mensuram supradictam. Et cariaabit suum in Manerio *et* pro singulis .x. bigatis allocabitur vnus dies operabilis Et faciet Cariagium apud Cerekishith' de onere cuiusdam dimidium quarterium frumenti vel cariaabit ad Melneflete quinquies onus supradictum vel cariaabit apud Stratishende ter onus predictum Et a fine autumpni vsque ad idem tempus incipiens operabit quolibet die Lune *et* quolibet die Mercurii .j. opus per .iiij. septimanas Et qualibet quarta septimana die Lune operabit .j. opus ita scilicet quod si triturare debet pro opere ; tunc debet triturare sicut Iohannes Le Neweman *et* Iohannes Clerk' *et* si alia opera facere debeat ; operabit sicut iidem Iohannes *et* Iohannes. Et dimidius dies operabilis allocabitur ei pro Redditu suo. Et pro arrua sua allocabitur eidem .j. dies *et* dimidius. Et si aueragium fecerit ; allocabitur ei opera vt predictum est *et* pro herciatura similiter. Et faciet sectam Curie.

(C16) Adam Orgor tenet de Domino vnum Mesuagium *et* .xv. acras terre quas Iohannes Orgor tenuit Reddendo inde ad Natale domini .ij. gallinas precium. vt supra Et ad Pascha .xv. oua. Et [metet per] .iiij. dies in autumpno ad cibum domini vt supra Et metet tres dimidias acras frumenti vel auene ad cibum prius

sumptum vt supra. Et operabit quolibet die Lune operabili et die veneris ab autumpno finiente vsque ad autumpnum incipientem Et si triturat pro opere ; tunc triturbabit pro quolibet opere vnam mensuram vt supradictum est. Et si aliquid aliud operari debet ; allocabitur sibi pro quolibet opere sicut Iacobus (sic) Le Neweman et Iohannes Clerk'. Et metet in autumpno quolibet die Lune die Mercurii et die veneris operabilibus dum Dominus habuerit Bladum ad metendum dimidiam acram frumenti vel auene sine cibo domini. Et faciet cariagium ad Nauem apud Melleflet et apud Strateshende modo supradicto. Et triturbabit vnam mensuram vt supra. Et auxiliabit ad bidentes tondendas. Et faciet sectam Curie.

< Lxx-f. / 90-f. >

(C17) Ricardus Le Kartere Iohannes Waryn Iordanus Skote et Serlo Le Neweman tenent de Domino .v. acras terre quas Beatrix Le Halte aliquando tenuit Reddendo inde per annum ad Pascha .iiij. d. Et ad Natale .j. gallinam Et ad Pascha .v. oua. Et faciet omnia alia seruicia et consuetudines eodem modo quo Adam Orgor facit scilicet quod non metet in autumpno nisi tres virgatas frumenti vel auene. Et faciet tres Bedrepes ad cibum domini vt supra. Et triturbabit .j. mensuram vt supra. Et auxiliabit ad oues tondendas modo supradicto. Et faciet sectam Curie.

(C18) Iohannes Waryn tenet de Domino .j. acram terre quam Gilbertus Le parmenter aliquando tenuit Reddendo inde ad Natale domini .j. gallinam. Et ad Pascha .j. ouum. Et metet in autumpno per .iiij. dies ad cibum vt Iohannes Martyn metet eciam tres dimidias acras frumenti vel auene sine cibo vt prius et promptum faciet predictum Bladum ad cariagium Et metet insuper in autumpno quolibet die Lune et die veneris sine cibo dimidiam acram frumenti vel auene et preparabit vsque ad cariagium. Et triturbabit vnam mensuram frumenti vel auene sicut et alii Custumarii. et auxiliabit ad oues tondendas Et mundabit bene cameram priuatam. Et faciet sectam Curie.

(C19) Iohannes filius Iohannis Le Hirde tenet de Domino vnum Mesuagium et .v. acras terre quas Gilbertus Skelle tenere consuevit Reddendo inde ad Natale domini .j. d. Ad Pascha .j. d. Et ad Nativitatem beate Marie .j. d. Et debet per annum .j. gallinam et .v. oua. Et metet per tres dies ad cibum consimiliter sicut Iohannes Waryn Metet etiam tres perticatas frumenti vel auene. sine cibo domini vt supra. Et metet in autumpno quolibet die veneris dimidiam acram frumenti vel auene sine cibo domini Et operabit quolibet die veneris ab autumpno finiente vsque ad autumpnum incipientem sicut et alii cons<sup>(10)</sup> qui per dies veneris operantur. Et triturbabit .j. mensuram Bladi sicut et alii Custumarii. Et debet auxiliare ad bidentes (sic) tondendas. Et faciet sectam Curie.

(C20) Idem Iohannes et Lytelwyf' vxor eius tenent de Domino .ix. acras terre quas Rogerus Gentilicors aliquando tenuit Reddendo inde per annum .iiij. s. videlicet ad festum sancti Michaelis .xij. d. Ad festum sancti Thome apostoli .xij. d. Et ad Pascha .xij. d. Et metet in Autumpno ad .iiij. Bedrepes. Et sciendum quod si dicta Litewyf' obierit ; dicta terra domino Priori debet reuerti eo quod non habebunt nisi ad terminum vite ipsius Litewyf'.

(C21-1) Beatrix Le Neweman tenet de Domino vnum Mesuagium et .v. acras terre quas Gilbertus Le Neweman tenuit. Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .vj. d. Et ad Pascha .vj. d. Et ad Natale .j. gallinam et .v. oua ad Pascha Et faciet omnia alia seruicia et omnes alias consuetudines vt predictus Iohannes filius Iohannis Le Hirde pro tenemento Skelle. (C21-2) Et pro dimidia acra terre quam Hamo filius Gilberti tenuit de Domino .iiij. d. ad festum sancti Michaelis (C21-3) Eadem Beatrix tenet de Domino .j. acram terre quam Radulfus Le Taillour tenuit Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .ix. d. Et ad Pascha .ij. Capones.

Mar. 2012 Middleton (Essex) における14世紀初頭の慣習保有農民 (Customarii)

(C22) Alanus Tutebouth tenet de Domino .ij. acras terre quas Radulfus Cose tenere consuevit Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .vj. d.

(C23) Gilbertus Le Neweman et Iohannes Potyn debent Domino de Redditu ad festum sancti Michaelis .xv. d. pro quadam terra quam Ricardus filius Gilberti aliquando tenuit de Domino.

(C24) Iohannes atte Felde tenet de Domino dimidiam acram terre quam Iohannes Godebright tenuit de Domino. Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .j. d. ob.

(C25) Serlo Le Neweman tenet de domino quandam terram quam Thomas ate Forde tenuit de Domino Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .iij. d.

(C26-1) Iacobus Le Neweman tenet de Domino quandam terram quam Robertus Le Neweman aliquando tenuit. Reddendo inde ad festum sancti Michaelis .j. d. (C26-2) Et pro terra quam emit de Domino de terra Iordani .viiij. d. ad festum Pasche. Et ad festum sancti Michaelis per equales porciones. Et preter hoc vnum vomerem ad festum sancti Michaelis. precium .vj. d. de tenemento eiusdem Iordani.

(C27) Iohannes Iacob (sic) debet domino vnum vomerem precium .vj. d. ad festum sancti Michaelis quem Iacobus Le Mazun reddere solebat.

(C28) Iohannes Chapman tenet de Domino quoddam Mesuagium quod Alfgarus de Hadlee tenere consuevit Reddendo ad festum sancti Michaelis .xij. d.

< Lxx-d. / 90-d. >

(C29) Henricus Picot tenet de Domino quandam terram quam Walterus Le Brasur aliquando tenuit. Reddendo inde ad festum sancti Michaelis vnum obolum.

(C30) Ricardus Le Cartere Iordanus Skote Serlo Le Neweman et Iohannes Waryn tenent de Domino vnum Mesuagium et .viiij. acras terre et .j. Rodam et .iij.<sup>(11)</sup> Deywerkas quas Robertus filius Iordani aliquando tenuit. Reddendo inde per annum ad festum sancti Michaelis .iiij. d. Et ad Pascha .iiij. d. Et ad Natale domini .j. gallinam precium vt supra. Et ad Pascha .viiij. oua. Et faciunt a festo sancti Michaelis vsque ad idem festum .v. opera per annum precium operis .ob. Et preter hoc operabunt in autumpno ad .iij. Bedrepis ad cibum domini. Et metet vnam acram vocatam Wyndaker et metet vltorius dimidiam acram terre sine cibo domini. Et faciunt sectam Curie.

(C31) Iohannes Waryn tenet de Domino .ij. acras terre quas Nicholaus Prisman aliquando tenuit. Reddendo inde ad festum sancti Thome Martiris .j. d. Et predicta terra aliquando fuit de terra Roberti filii Iordani. Idem Iohannes Waryn reddit domino per annum .viiij. d. ad duos terminos videlicet ad festum sancti Michaelis et ad Pascha per equales porciones quos idem Nicholaus Prisman reddere consuevit ad eosdem terminos.

(C32) Iohannes Le Noreys reddit Domino .j. d. annui redditus ad festum sancti Michaelis pro vna acra terre quam Ranulphus Cocus aliquando tenuit de tenemento Samuel' atte Feld'.

(C33) Alicia Hugnes debet Domino<sup>(12)</sup> de Redditu ad festum sancti Michaelis .xij. d. De quodam tenemento quod<sup>(13)</sup> Alexander Hugnes<sup>(14)</sup> quondam vir suus tenuit de predicto Roberto Iurdon qui quidem Robertus predictum Redditum eidem domino concessit.

(C34) Turtle atte Cruche debet Domino de Redditu per annum .xj. d. videlicet ad Pascha et ad festum sancti Michaelis per equales porciones percipiendo de predicta Turtle de vna domo (sic) cum vna pecia terre quam Hugo le Driwere aliquando tenuit et quondam fuit Iohannis Silok' quem quidem redditum Samuel ate felde aliquo tempore concessit domino Priori tempore Iohannis de Belstede seneschalli. Et idem Samuel obligauit se quod si predictus Redditus a retro fuerit ; et sufficiens districtio inuenire non poterit in predicto tenemento

; *quod bene Liceat domino Priori et Ministris suis qui pro tempore fuerint districti in toto tenemento ipsius Samuel' quousque domino Priori de predicto Redditu plene fuerit satisfactum.*

(C35) Iacobus filius Serlonis Le Neweman debet Domino de Redditu ad festum sancti Michaelis et Pascha .ix. d. *per equales* porciones de quodam tenemento vocato Le Westlond quod quondam fuit Iohannis Orgor patris Ade Orgor.

(C36) Thomas Le Neweman debet domino de Redditu ad festum sancti Michaelis .ij. d. de .iij. Deywerkis terre quas Elias vaccarius reddere consuevit quem quidam Redditum Stephanus Potyn aliquando domino concessit ad percipiendum de eodem tenemento.

#### [L]ibertates.\*

Et sciendum quod Dominus Prior est Capitalis Dominus Manerii de Middeltone. et habet ibidem sicut et alibi Libertatem cognoscendi de Infangenethief et Vtfangenethief' cum manu opere captu' et facere Iudicium eorundem in Curia sua de Middleton' per Balliuos suos eiusdem Curie si se in eadem Curia ponere voluerint sint autem ; mittantur ad Gaolam de Reylegh' quousque et cetera.

#### Furce.\* [Tu]nberellum.\* [W]arenna.\*

Sciendum est eciam quod Dominus istius Manerii habet ibidem visum franciplegii tentum per Balliuos suos nec aliquis Minister domini Regis vel alterius ibidem in aliquo se intromittat. Et Furce iudiciales eiusdem Manerii debent stare apud Le Richemannes iuxta tamisiam super terram Laurentii Le Porter < Lxxj-f. / 91-f. > in feodo domini et ibi stant. Tumberellum vero stat vltra quendam putenum ex opposito Manerii versus austrum in quodam Loco vocato Suthmede Pillorium vero ibidem non habetur ideo inde ad Loquendum. et cetera.

Et sciendum est quod Warenna est in Manerio et pertinet ad Manerium.

#### 注

- 1) Register B では .iij. s. と記されている。
- 2) Register B では sibi と記されている。
- 3) Register B では Willelmus と記されている。
- 4) Register B では etiam と記されている。
- 5) mensam の誤りであろう。
- 6) Register B では similiter と記されている。
- 7) Register B では terrarum と記されている。
- 8) Register B では Iohannes と記されている。
- 9) Mercurii の誤りであろう。
- 10) customarii の誤りであろう。
- 11) Register B では .iiij. と記されている。
- 12) Register B では Dominus と記されている。
- 13) Register B では quod が欠落している。
- 14) Register B では Hugnes が欠落している。

(2011年12月9日掲載決定)